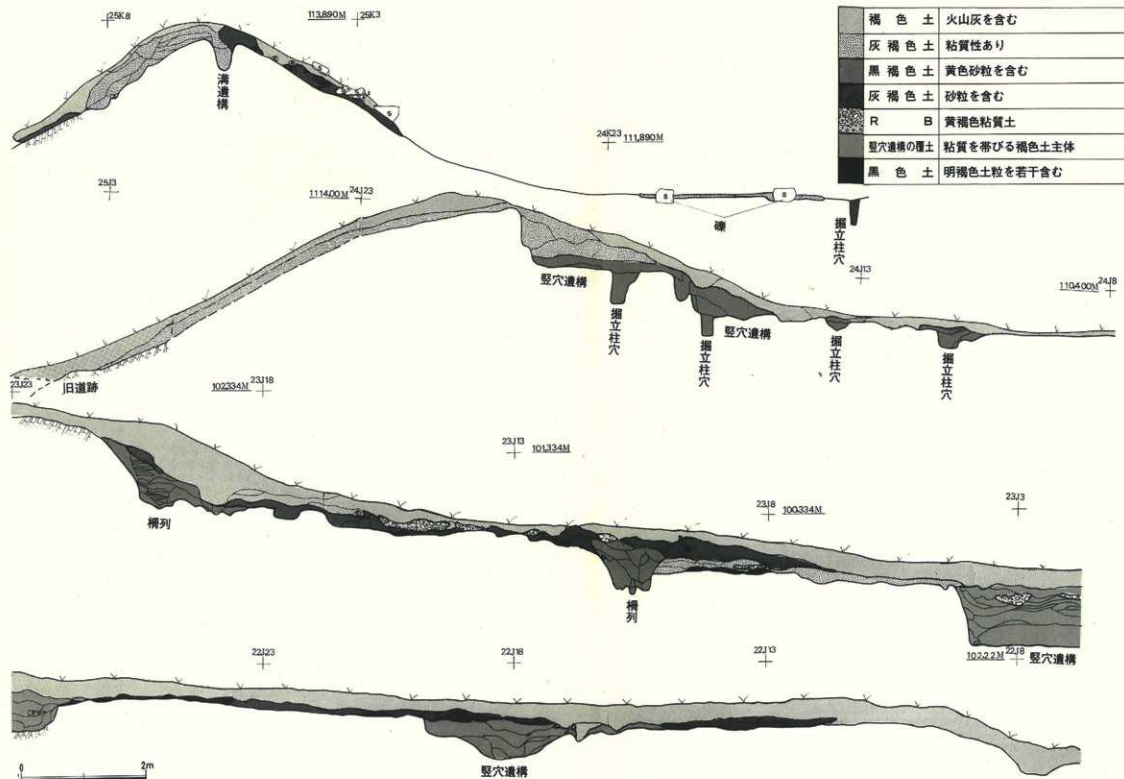
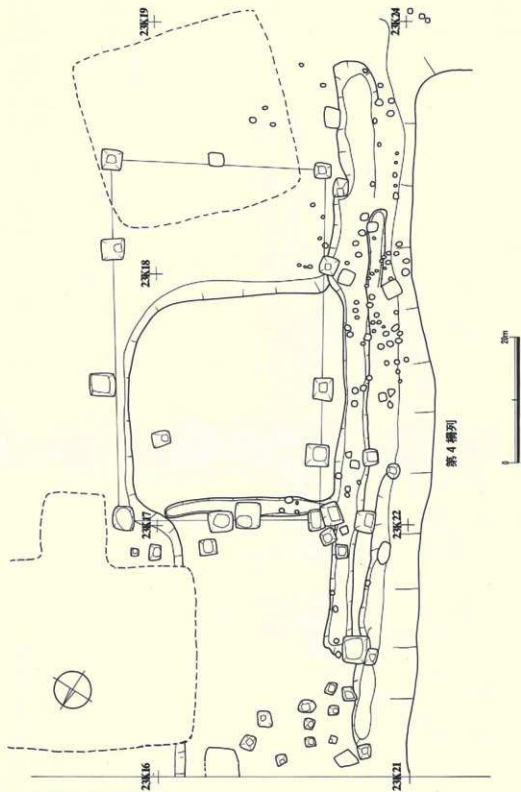


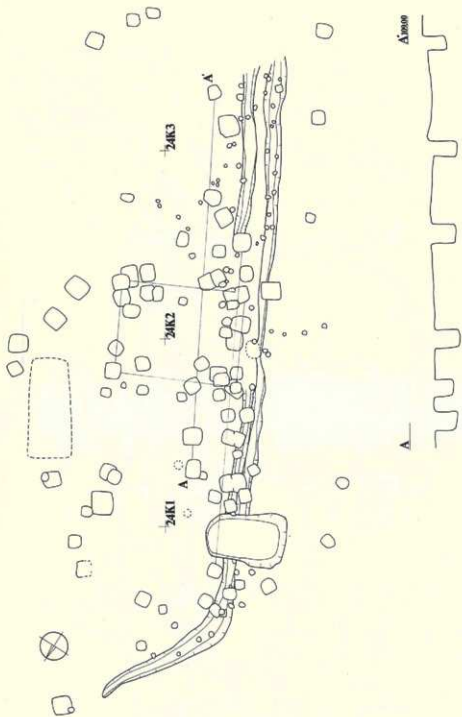
第4图 第1、第2棚列踏实例图



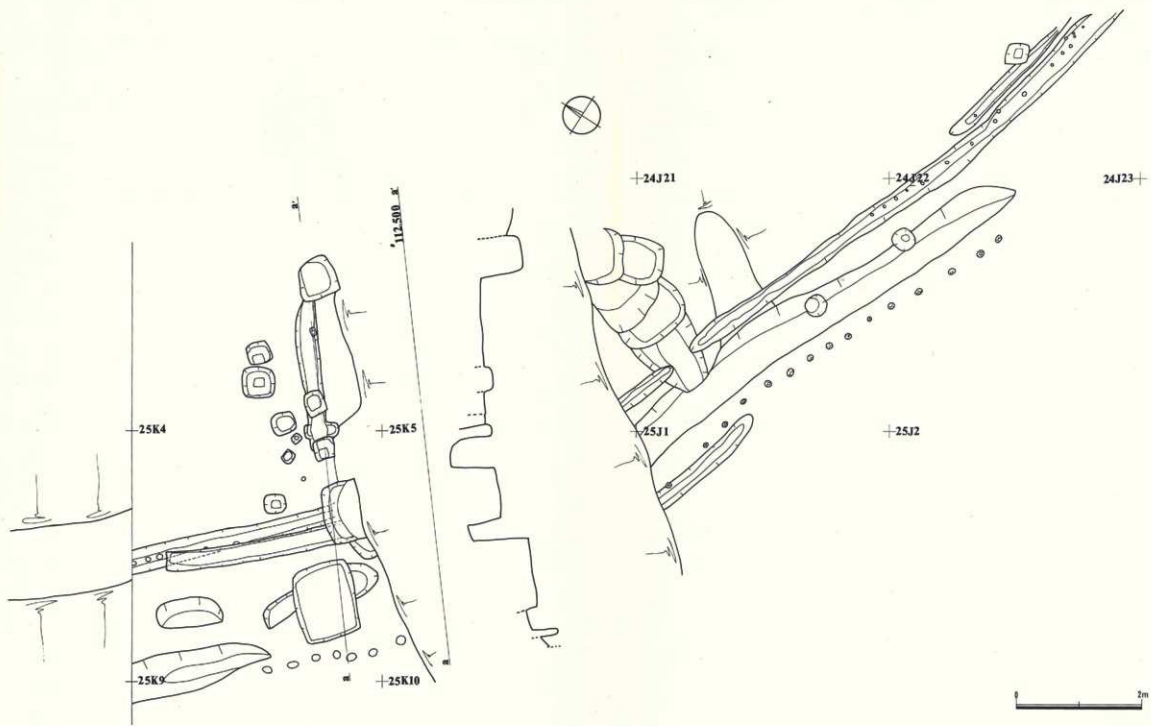
第5図 発掘区地層断面図 (南北ロングセクション)



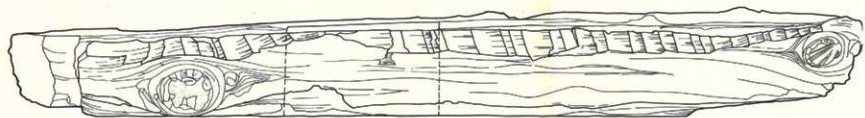
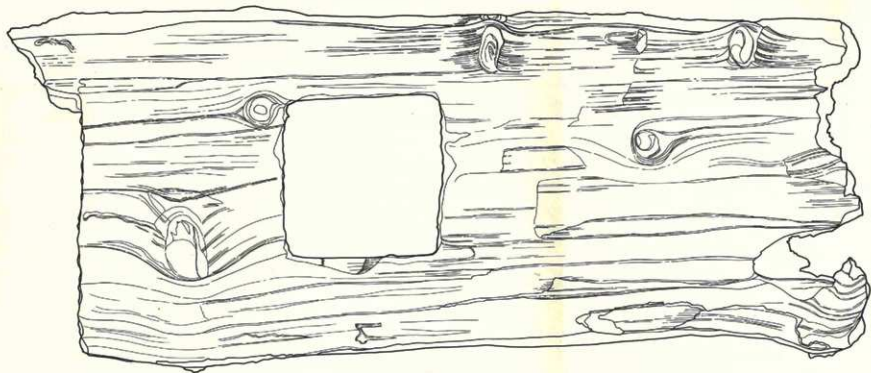
第6図 第4横列跡実測図



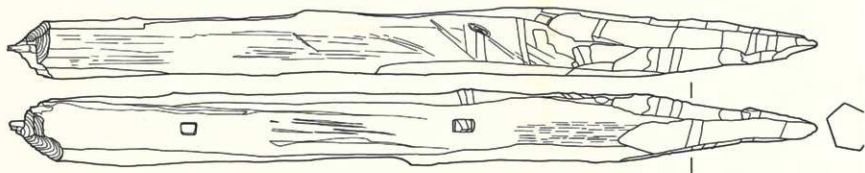
第7図 溝遺構及び柱穴列実測図



第8図 溝遺構及び柱穴列・小路状遺構



16



17

第28図 木製品 (楯、台材、その他)

### 11号整穴 (第10回)

自然研究路西側の第2平坦地西寄り (24 K 1 区) に位置し、同地区の東寄りに12号がある。本整穴は第1号掘立と他の小規模柱穴群との重複関係にある。

規模は径が約2.4mを測り方形を呈している。舌状の張り出し、周溝、柱穴の痕跡はなく、床面の焼土も確認されなかった。

壁高は約90cmを測り、堆積土は掘り上げ土と思われる黄褐色砂礫土が80%程度をしめており、上層にはソフトな暗褐色土が約30cm堆積している。堆積土中あるいは床面上における出土遺物はないが上層部の暗褐色土中には大型礫が多数含まれていた。

### 12号整穴 (第10回)

11号と同じ平坦地でその東寄りに位置する。又、11号同様に1号掘立と小規模柱穴群との重複関係にある。

規模は東西に2.2m、南北に2.7mで多少長方形を呈するもので舌状の張り出しはない。整穴内には柱穴が6個、南北方向に2本の周溝がある。柱穴の配置より東西方向2間は1.55m (5.11尺)、南北1間は1.6m (5.28尺)となる。東西の柱間は西から0.65m (2.15尺)、1.85m (2.8尺)を測る。

掘り方は径20~25cmを測り深さは25cmを測る。平面形は不整の隅丸方形を呈す。

周溝は東西の壁際に2本ある。幅は15cmで床面よりの深さ7~8cm程度である。

床面の北西隅に90~105cmの炭化物の分布があり、その中に炭化木が数本混っている。

壁高は85cmを測り、堆積土は粘性を帯びた暗灰褐色土が約70%をしめ、その上層に約30cmのソフトな灰褐色土が堆積する。

遺物は主に上層部より出土する。

### 13号整穴 (第11回)

自然研究路東側の頂部平坦地ほぼ中央部に位置する。本遺構の周辺には柱穴群があり (一部重複する)、東側にはL字状の溝遺構、さらに南側には数基の整穴 (14~18号) がそれぞれ重複して位置する。

規模は一辺が2.9mのやや不整の方形を呈するもので東方向に長さ約1.5mの舌状の張り出しがある。舌状の張り出しは階段状になっている。

整穴内には柱穴が9個で他に杭状の小ピットが3個、血状の浅いものが2個ある。

柱穴の位置より東西2間は1.95m (6.44尺) 南北1間は1.8m (5.94尺)を測るが、張り出し寄りに間に2本分の柱穴が入り、その柱間は南から0.75m (2.47尺)、0.75m (2.4尺)、0.5m (1.65尺)となる。

東西の柱間は西から0.9m (2.97尺)、1m (3.3尺)となる。

掘り方は径15~20cmを測り、深さは20~25cmを測る。平面形は隅丸方形を呈す。

周溝は張り出し寄りに逆L字状に残り床面より5cm程度の深さを測る。

床面の南東側コーナー寄り (張り出し寄) で1.25m×0.8mの範囲で炭化物が分布している (厚さ約4m)。その中央部には長径45cmの楕円形を呈し浅い掘り込みを有す地床がある。

壁高は86cmを測り、堆積土は粘性の強い灰褐色土が90%以上をしめる。床面直上には厚さ10cm程度の粘性のある黒色土が堆積する。

灰褐色土中には多量の礫が含まれていた。遺物は本遺構を覆っている白色火山灰直下より出土する。

### 15号~18号整穴 (第12回)

本整穴群は13号より南側へ約2m離れた位置にあるが床面の比高差は1.5m以上ある。

本遺構はさらに西側にも数基が分布しておりそれらの殆んどが近世時の石積の階段の真下に存在する。その一部が昨年度の調査で検出された (14号) がプラン確認だけに留めている。

15号~18号は、切合いが激しいことと後世による遺構造成等によって原形を留めているものではなく、わずかに床面を残すものばかりである。

15号は南側半分が残存するもので一辺が約2.5mの隅丸方形を呈するものと思われる。東方向に舌状の張り出しの痕跡が認められる。

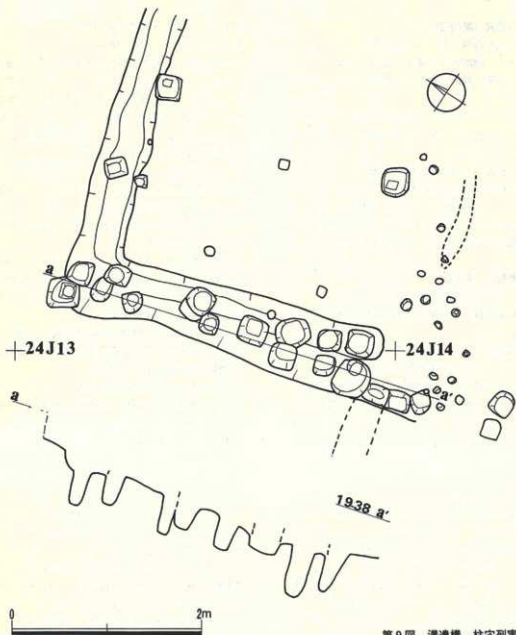
整穴内には柱穴が5個、杭状の小ピットが2個、血状の浅いピットが1個検出された。又、張り出し付近に周溝の一部と思われるものが残っている。

残存する柱穴の配置より東西1間は1.7m (5.61尺) 尺)、南北2間は1.4m (4.62尺)となる。

掘り方は径20cmを測り深さ20~25cmを測る。

平面形は丸味を帯びた方形を呈す。

壁高は残存部 (南側) で15cmを測る。



第9図 溝遺構、柱穴列実測図

16号は一辺が約2.5mの隅丸方形を呈する。北側に15号、東側に16号が重複しており立ち上り壁は消滅している。舌状の張出しの痕跡は認められない。竪穴内は他の柱穴列等も混入しているか、本竪穴に伴うと思われる配置により8個が検出された。計測値より東西2間は1.7m (5.61尺)、南北2間は1.95m (6.43尺)を測る。柱間はR~P<sub>2</sub>間0.9m (2.97尺)、P<sub>2</sub>~P<sub>3</sub>間1.05m

(3.46尺)、P<sub>3</sub>~P<sub>4</sub>間0.9m (2.97尺) 0.9m (2.97尺) P<sub>1</sub>~P<sub>2</sub>間0.9m (2.97尺)、P<sub>2</sub>~P<sub>3</sub>間0.95m (3.13尺) P<sub>4</sub>~P<sub>5</sub>間1m (3.3尺)を測る。掘り方は径25cmを測り深さ50cmを測る。平面形は方形を呈す。壁高はわずか10cmを残すだけである。17号は計測不可能である。東西に16号、18号と重複関係にありさらに南側は土留斜面成形時に削平され消滅している。



残存するものは約半分の床面とL字状の周溝と柱穴が3個だけである。

柱間は $P_1 \sim P_2$ 間1.3m (4.29尺)、 $P_2 \sim P_3$ 間1.65m (5.44尺)を測る。

掘り方は径15~25cmを測り深さ60~75cmを測る。平面形は方形を呈す。

周溝は最大幅が約60cmあり最小で25cmを測る。

床面からの深さは約20cmを測る。

壁はなく17号の床面は16号との間に20cmの比高差がある。

18号は床面中央部を溝遺構が南北に切合い、東側は斜面成形時に一部削平されている。

残存部の計測値より規模は一辺が約2.6mを測る隅丸方形を呈するものである。

舌状の張り出しは認められない。

竪穴内には柱穴4個を検出した。 $P_1 \sim P_3$ は西側の壁際に配列するがそれに対応するのは $P_4$ 1個のみである。柱間は $P_1 \sim P_2$ 間1.1m (3.63尺)、 $P_2 \sim P_3$ 間0.9m (2.97尺)を測る。

掘り方は径20cmを測る。深さは $P_3$ を除いては30cmを測る。平面形は方形を呈す。

壁高は残存部で約45cmを測る。

#### 19号竪穴 (第13圖)

23J区、2m幅トレンチ内で検出されたもので発掘していない。

検出されたのは舌状の張り出し部分と炭化物が分布する地床が、そして柱穴3個、杭状のビット9個、周溝2本である。張り出しは東方向にある。

張り出し部には杭状ビットが4本単位で2列並びそれに沿って周溝がある。

3個の柱穴の計測値によると $P_1 \sim P_2$ 間0.95m (3.13尺)、 $P_2 \sim P_3$ 間0.95m (3.13尺)となる。掘り方は $P_1$ 、 $P_2$ は径10cm前後で深さ30cmを測る。平面形は隅丸方形を呈す。

$P_3$ は径30cmを測り深さ23.5cmを測る。

平面形は不整の方形を呈する。

炭化物と地床が張り出し寄りにあり炭化物の範囲は1.2m×1.1mで厚さ約2~3cmの堆積である。地床がは、径45cmを測り隅丸方形の皿状の浅い掘り込みである。

壁高は95cmを測り、堆積土は粘性の灰褐色土とローム状の混合土が全体をしめている。間層に焼土、火山灰が入る。

#### 20号竪穴 (第13圖)

北側の19号と張り出し部分で重複している。

19号同様に完備していないが全体の70%位検出された。規模は一辺が2.4mの方形を呈すものと思われる。張り出しは北側にありその先端部が19号と切合っている。それによると19号より古い時期に構築されたものである。

竪穴内には柱穴が5個と張り出し部に周溝2本が検出された。

現存の柱穴の配置から想定すると東西2間、南北2間の8本柱穴と思われる。計測値より柱間は $P_1 \sim P_2$ 間0.9m (2.97尺)、 $P_2 \sim P_3$ 間0.85m (2.8尺)、 $P_3 \sim P_4$ 間1m (3.3尺)、 $P_4 \sim P_5$ 間1m (3.3尺)となる。掘り方は径10cm前後で深さ15~23cmを測る。

平面形は方形を呈する。

周溝は幅10cm、深さ10cm程度で張り出し部にあるが床面上での痕跡は認められなかった。

壁高は80cmを測り、堆積土は粘性の灰褐色土が主体で多数の大型礫が混入している。その上層部にソフトな暗褐色土が約20cm堆積する。

堆積土最上部に白色火山灰が薄く堆積する。

出土遺物は暗褐色土上部に集中している。

#### 24号竪穴 (第14圖)

自然研究路西側の第3平坦地にあり、本遺構より西側に約4m離れて25号、26号が位置する。

小規模な建物様の配列をなす柱穴群と重複している。規模は一辺が2.6mの方形を呈するもので、舌状の張り出しは有しない。

竪穴内には東西2間、南北2間の8本柱穴を検出した。

計測値より各柱間は $P_1 \sim P_2$ 間0.85m (2.8尺)、 $P_2 \sim P_3$ 間0.85m (2.8尺)、 $P_3 \sim P_4$ 間0.9m (2.97尺)、 $P_4 \sim P_5$ 間0.95m (3.13尺)、 $P_5 \sim P_6$ 間0.95m (3.13尺)、 $P_6 \sim P_7$ 間1.1m (3.63尺)、 $P_7 \sim P_8$ 間0.9m (2.97尺)、 $P_8 \sim P_9$ 間0.95m (3.13尺)となる。

掘り方は $P_1 \sim P_3$ 、 $P_5 \sim P_6$ は径8~15cmを測り $P_4$ 、 $P_8$ は20~30cmを測る。

深さは一定しておらず $P_1$ 、 $P_5$ 、 $P_7$ は10cm以下を測り、 $P_2$ は23cm、 $P_3$ 、 $P_4$ 、 $P_6$ は12~16cmを測るもの等が混在している。

北東寄りのコーナーには90~70cmの範囲で炭化物が分布している。

壁高は80cmを測り、堆積土は砂礫を多く含む灰褐

色土が主体で全体に固くしまっている。

#### 25号、26号整穴 (第15図)

24号の西側に位置し、周辺に分布する柱穴群と一部重複している。

本遺構は舌状の張り出しが北方向のものと東方向のものが重複しさらにその内部で柱穴の配置が異なるものもあること等から想定すると3~4回の建替えが行なわれたものと思われる。

25号とした張り出しが北方向のものは、東西2.1m、南北2.5mを測り隅丸長方形を呈す。

整穴内は9個の柱穴と張り出し部と床面を全周する周溝が検出された。

柱穴の配置より東西2間1.6m (5.28尺)、南北2間1.8m (5.94尺)の8本柱穴、張り出し部分は出入口の関係で3間になっている。

計測値より各柱間は $P_1 \sim P_2$ 間0.85m (2.8尺)、 $P_2 \sim P_3$ 間0.85m (2.8尺)、 $P_3 \sim P_4$ 間0.75m (2.47尺)、 $P_4 \sim P_5$ 間0.8m (2.64尺)、 $P_5 \sim P_6$ 間0.95m (3.13尺)、 $P_6 \sim P_7$ 間0.85m (2.8尺)、 $P_7 \sim P_8$ 間0.65m (2.14尺)、 $P_8 \sim P_9$ 間0.5m (1.65尺)、 $P_9 \sim P_1$ 間0.35m (1.15尺)となる。

掘り方は比較的大きく径20cmを測り、深さ30cmを測る。平面形は隅丸方形を呈す。

北東寄りのコーナーに70cm×140cmの範囲で炭化物が分布している。

周溝は幅10cm前後で床面から7~8cm掘り込んでいる。

壁高は80cmを測り、堆積土はロームブロックを多く含む暗褐色土が主体でやや固くしまっている。遺物はその上層部より出土する。

26号とした張り出しが東方向にあるものは柱穴の配置から想定復原すると東西約2.6m、南北約2.2mを測る隅丸長方形を呈するものと思われる。整穴内には15個の柱穴が検出されたが、各柱間の計測値より想定すると三分分の建物になる。まず第一基は $P_1$ 、 $P_3$ 、 $P_5$ 、 $P_7$ 、 $P_9$ で構成するもので検出したものは5個だが6本柱穴と思われる。各柱間は $P_1 \sim P_3$ 間0.8m (2.64尺)、 $P_3 \sim P_5$ 間1m (3.3尺)、 $P_5 \sim P_7$ 間1.85m (6.1尺)、 $P_7 \sim P_9$ 間0.9m (2.97尺)となる。

掘り方はやや大き目で径20~25cmを測り深さは $P_1$ 、 $P_3$ 、 $P_5$ は23~26cm、 $P_7$ 、 $P_9$ は13~16cmを測る。平面形はやや不整の隅丸方形を呈す。

第2基目は $P_2$ 、 $P_4$ 、 $P_6$ 、 $P_8$ で構成するもので4

本柱穴である。各柱間は $P_2 \sim P_4$ 間1m (3.3尺)、 $P_4 \sim P_6$ 間1.85m (6.1尺)、 $P_6 \sim P_8$ 間0.9 (2.97尺)となる。

掘り方は径15~20cmを測り深さ18~23cmを測る。平面形は不整形を呈す。

第3基目は $P_1 \sim P_2$ 、 $P_4$ 、 $P_6$ で構成するもので、5個だが第1基と同様の6本柱穴が想定される。各柱間は $P_1 \sim P_2$ 間0.8m (2.64尺)、 $P_2 \sim P_4$ 間0.8m (2.64尺)、 $P_4 \sim P_6$ 間1.65m (5.45尺)、 $P_6 \sim P_1$ 間0.7m (2.31尺)となる。掘り方は径12~13cmを測り、深さ14~17cmを測る。平面形は隅丸方形を呈す。

第1基と第2基は東方向の張り出しに伴うと思われるが第3基は25号の北方向の張り出しに伴うものと思われる。

壁高は25号が80cmを測り、26号は40cmを測る。ちなみに床面の比高差は26号が25号より約20cm高い。

#### 5、その他 (第16図~18図)

本項では、その他として比較的時期が新しいもの(石垣状遺構、集石、石列、土壇、旧道跡等)、性格の不明な土壇、柱穴群、小路状遺構等を一括した。

第16図は集石、石列等の分布を示している。

集石は、整穴が存在する凹み部分、櫓が存在する部分等に多量にみられる。

これらはあきらかに後世に何らかの形で数ヶ所に廃棄されたものと思われる。

又、これら多量の礫は基盤を掘り下げた時(整穴や空壕等の遺構構築の為)にあがったものではなく他方面より持ち込んできたと思われるものが多い。つまり当時はこの郭内に石積の遺構(石垣、建物遺構に関連する石列等)が各地に存在していたことが想定される。

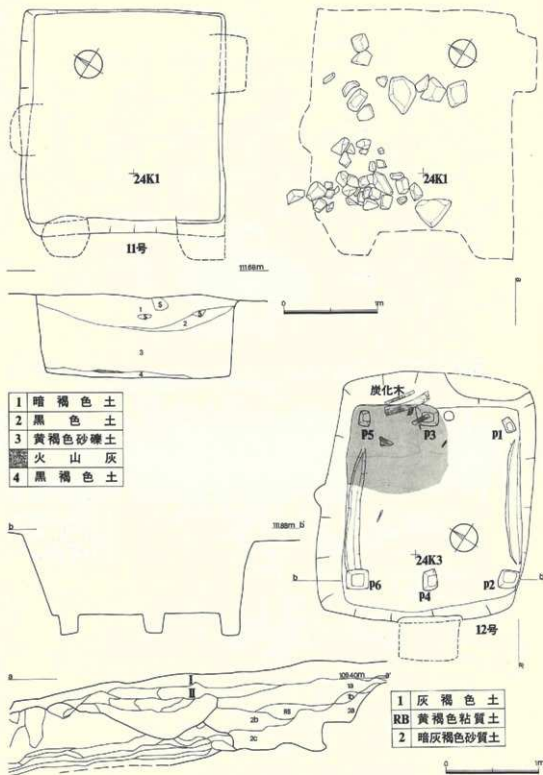
石列(第17図)は南側土塁(土堤)の頂部に存在し、ひとつは研究路東側で石積の階段の延長部南側にある。

これは階段につながるものと思われ、ほぼ同時期であることが想定される。

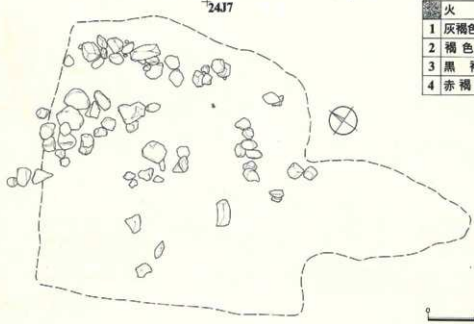
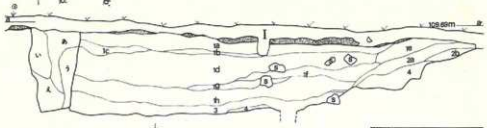
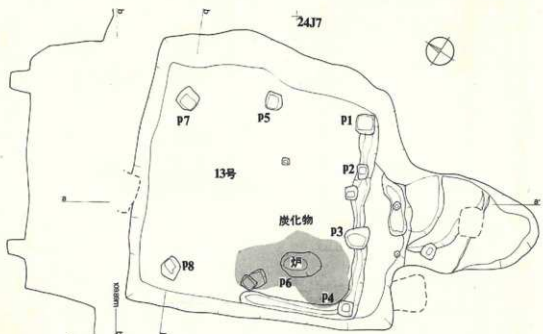
もうひとつは研究路の西側で、並んでいる礫は東側のものより部近く大きいものである。

この石列の下部には白色火山灰の堆積が認められたことから近世時のものと判明した。

研究路の東側における南側土留(土堤)の南斜面に存在する旧道跡は長さ27cm、幅約60cmを測る。



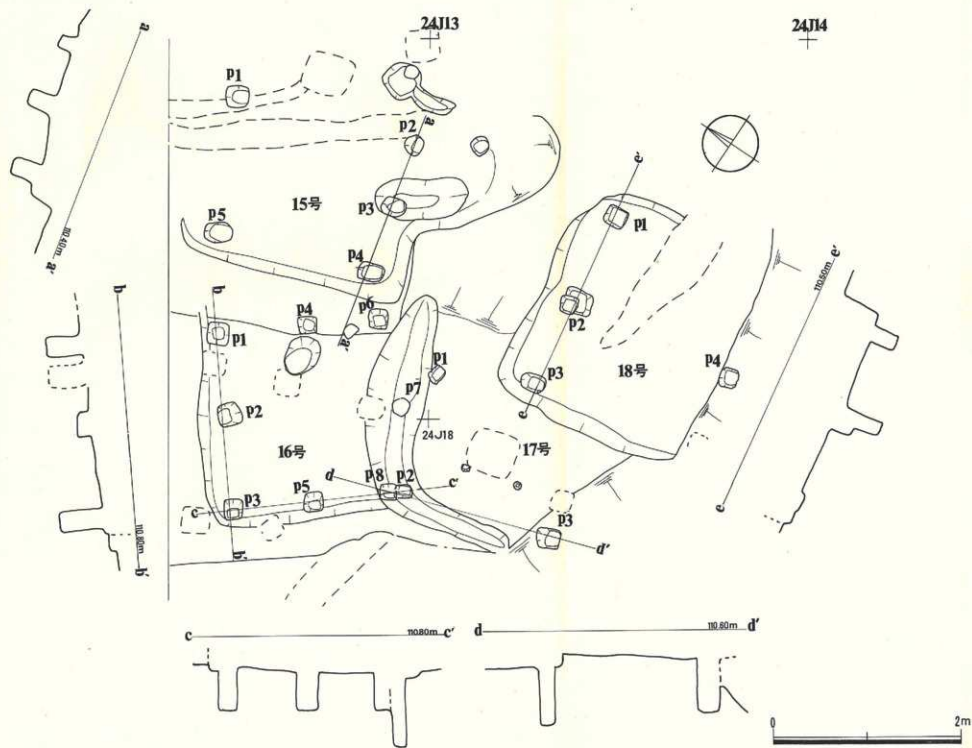
第10图 第11号・12号竖穴实测图



火山灰	
1	灰褐色土(明·暗)
2	褐色土(明·暗)
3	黑褐色土
4	赤褐色粘出土

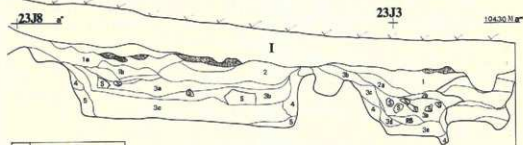
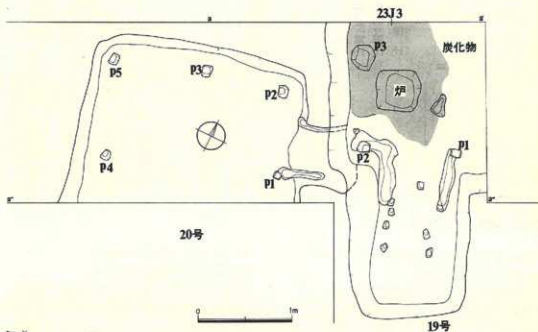


第11图 第13号整穴实测图



第12图 第15号~18号竖穴实测图

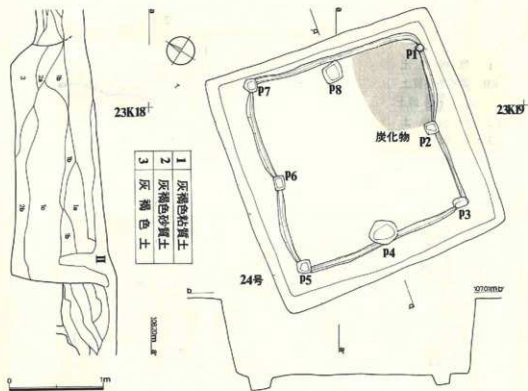
1	暗褐色土
RB	黄褐色粘质土
	火山灰
	烧土
2	灰褐色土
3	黄褐色土



1	褐色土
2	黄褐色土
3	灰褐色土
4	黄褐色粘质土
5	暗灰褐色土

1	明褐色土
2	暗褐色土
3	灰褐色土
4	黄褐色粘质土

第13图 第19号·20号竖穴实测图



第14図 第24号壑穴実測図

現状は、部分的に地すべり現象によってとぎれとぎれになっている（附図1）

この道路跡については時期が不明だが、ちょうど研究路の付近でとぎれる部分において、勝山館Ⅲの第9図で報告した道路状遺構との路面の比高差がまったくないことからこれに接続する可能性がある。

第8図はやはり南側土塁（土堤）の頂部で検出されたものである。

第8図は小路状遺構で、本遺構には杭状のビット（径10～15cm）が南側斜面に列をなして付設するようにある。同様のものが研究路西側にもみられる。同じく第8図の柱穴椽ビットは大きなもので径100cm～50cmを測り、小さなものは径30cm前後を測る。これらはほぼ南北に列をなし柱間に溝遺構が走る。

溝遺構は幅35cmを測り深さ36～40cmを測る。配置状況から建物遺構を想定するならば門あるいは、櫓と思われるが、現存の配列に対応するものは現研究路構築時に消滅してしまったと考えられ

る。このため、確定ができない。

第18図は性格不明の土壇である。

昨年度と本年度の調査で約8基が検出された。

そのうち22、23K区に分布するものはプラン確認だけに留めた。

調査したのは1号～4号（1号～3号は昨年度検出）でそのほとんどが原形を留めていない。

1号は長軸2m、短軸60cmを測る長方形を呈するもので、深さは約10cm程度である。土壇内には10cm前後の玉砂利が多量に混入していた。

2号は長軸2.1m、短軸1.2m以上を測り隅丸方形を示す。北側約半分は第2平坦地造成時に消滅したものと思われる。さらに南側は掘立柱と重複している。長軸方向は北西～南東を示す。

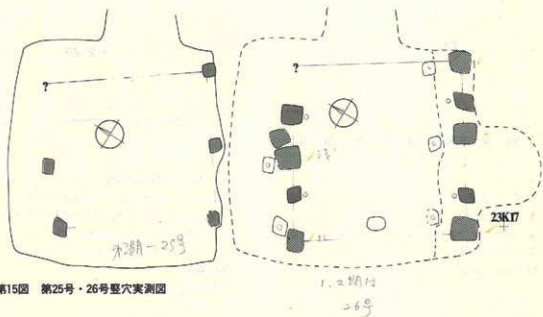
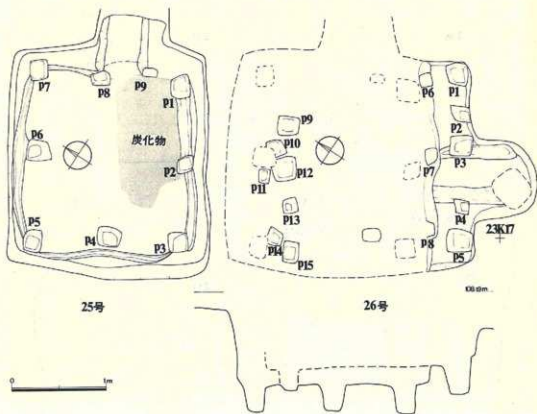
深さは残存部（南側壁）で約1.1mを測る。

3号は長軸2.2m、短軸95cmを測る長方形で1号と同規模、同形態のものである。

深さは約48cmを測る。

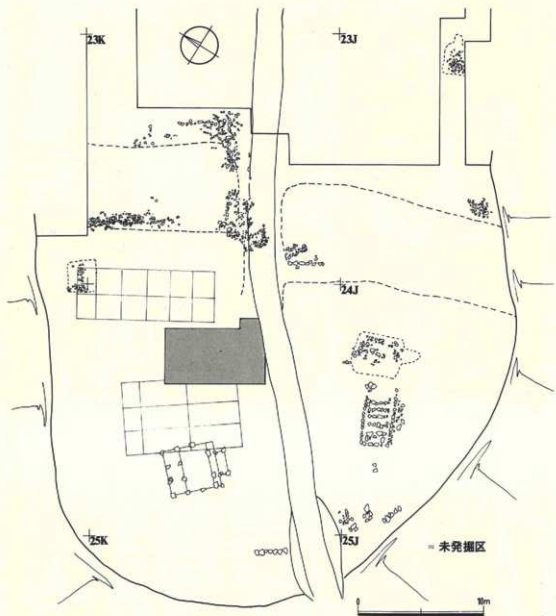
長軸方向は南北方向を示す。

4号は一辺約2.4mを測るがもう一辺は計測不



第15图 第25号・26号竖穴実測图





第16図 礎分布図 (石垣様遺構、石列、集石等)

可能である。

内部には壁際に杭状ビット (径6~10cm) を7個配している。

又、床面はやや東側へ傾斜しており西側との比高差は約20cmを測る。

壁高は50~60cmを測る。

(藤田 登)

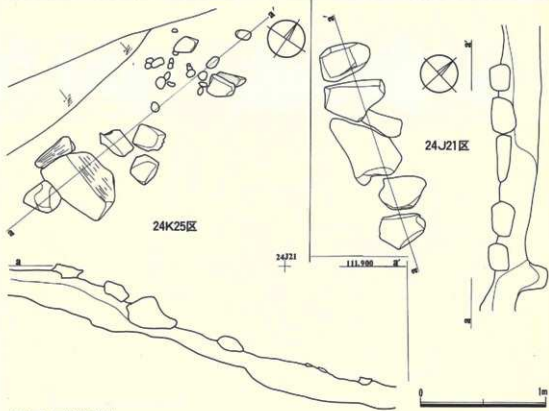
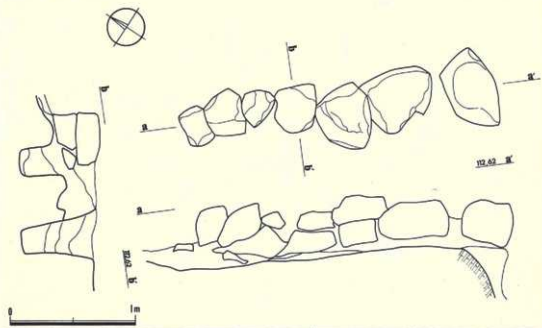
#### 6、寺の沢地区用水施設

当地区からは昭和56年に桶状木製品が発見された。その用途あるいは関連施設の確認のため昭和57年に調査を行なったが猶判明しない点が多々あったため今年度も引き続き調査を行なった。

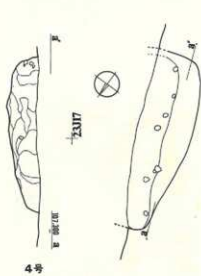
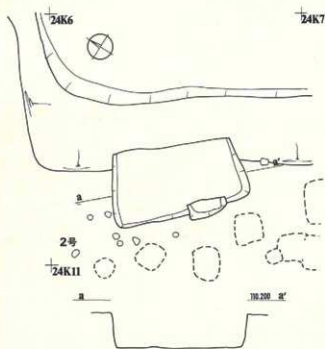
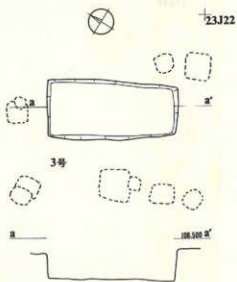
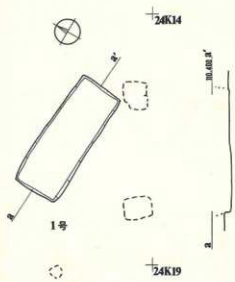
#### 池状遺構

昭和57年度は当箇所南北トレンチ、東西トレ

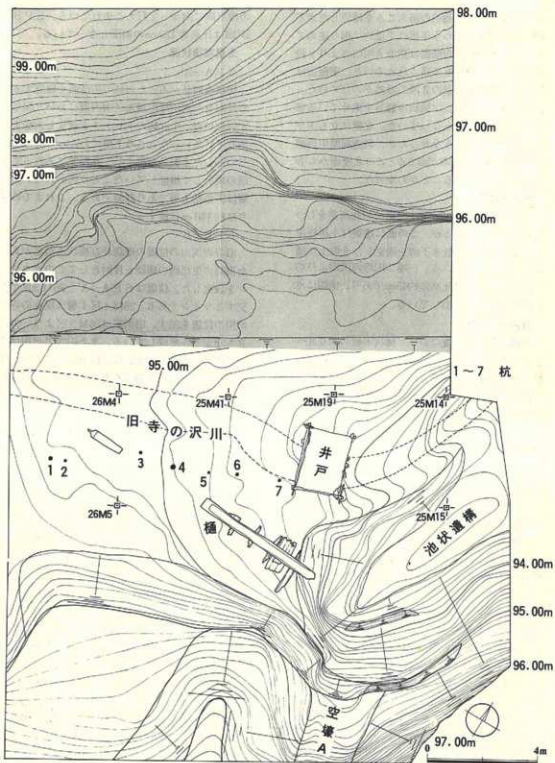
24K19



第17图 石列实测图



第18图 土壤实测图



第19図 用水施設地形図

ンチ4本を入れ、池状の落ちこみを確認したが不明瞭な点が多いため今年度は平面的に掘り進めていった。その結果南壁面は空壕A開口部より2段の段差を有し急角度で落ち込んでいた。東壁面は空壕Aに連続し南壁の2段の段差がのびていた。西壁面はやや内湾し、桶状木製品を乗せている黒色土が掘り込み面となっていた。北壁は立ち上がり明瞭に確認できなかったが、調査期間中の観察の結果約80cm程水が溜まるとこの北壁面から寺の沢川へ水が流れることがわかった。

#### 桶状木製品

第20図EPA-A'間は約40cmの比高差をもつ緩斜面になっているが、この面に建築材を再利用した5本の台材を敷き下部を固定し、その上に桶状木製品をのせている。一端は旧寺の沢川より約7mの距離があり比高差約45cmであり、他端は池状遺構の西壁に突出している。

#### 井戸 (第21図)

昭和57年度の調査において桶状木製品より北へ2mのところにおいて1741年噴出の渡島大島火山灰を乗せる集石が発見された。この集石の中には方形の板材4本、杭3本が打ちこまれておりその性格が不明なため調査を継続した。石を除去していったところ下部より長方形の木棒が発見され、その底面は基盤に達していた。木棒は外寸230cm×170cmの長方形をなしており深さ80cm程である。周囲の土壌は黒褐色の腐植土であり木棒の腐朽が激しいが、内側は幅14cm、高さ約6~7cm、厚さ1~2cmの板材が東に7枚、西には2枚程残存する。南は8枚、北はわずかに4枚程である。いずれも縦位置の状態を示している。さらに四隅には礎石を置きその上に上下2つのほぞを切った角柱をたて外側の横木をさしこみ交差させている。残存するのは3本である。それぞれの組み方は南東隅は東の横木を上ほぞ穴に、南の横木を下ほぞ穴に通している。南西隅は南の横木を下ほぞ穴に、西は上ほぞ穴に、北東隅は最も大きな礎石を置いており、東の横木は途中で腐朽しているが、上ほぞ穴に、北の横木は下ほぞ穴に入っている。

#### 杭列 (第19図)

旧寺の沢川に並走している寺の沢川のほぼ中央を1m~1m40cmの間隔を保ちながら7本が井戸

の南東隅に向かって打ちこまれている。EPB-B'間は比高差120cmの斜面となっている。

#### 土層堆積状況

##### SPA-A'

桶状木製品があった当時の生活面を確認するために旧寺の沢川岸の調査区南西端において図示していないが、1m幅のトレンチを設定し沢底まで掘り下げていったところ7層にわたって漆器をはじめとした木製品が出土し、長期間にわたって生活の場として機能していたことが同われた。尚V層は灰色粘土層であり基盤である。これまでの深さは約140cmに達する。

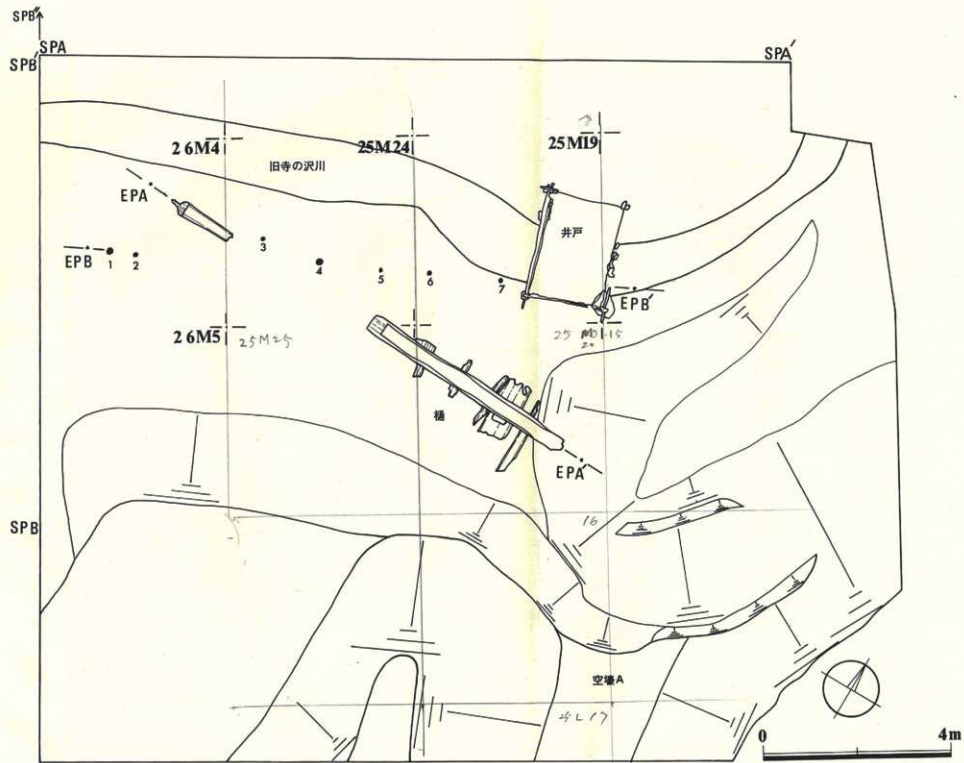
##### SPB-B'

旧寺の沢川の位置の確認及び桶状木製品があった当時の生活面の確認を目的としてこのセクションを設定した。位置はSPA-A'と26M3区で直交するラインである。26M4区I層は現在の寺の沢川の位置を示す。旧沢底は26M3区より一方の立ち上がりを形成している。また旧寺の沢川は若干の落ちこみを有する26M3区B2層である。尚井戸、杭列、桶状木製品を乗せる層はD3層である。

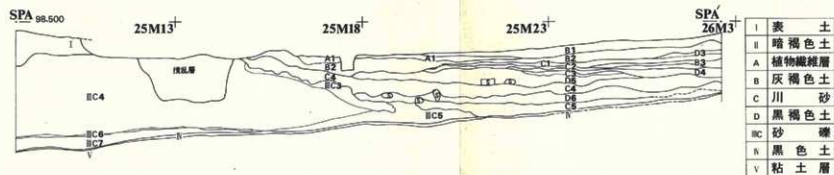
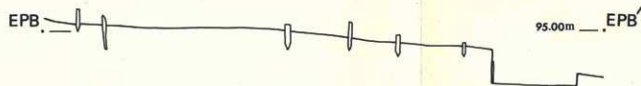
#### まとめ

池状遺構はEPA-A'のみで旧寺の沢川附近から緩斜面で続いており、ゆるやかな水の流れが想定でき桶状木製品を伝わって水が流れこむようになっていたと解される。東壁、南壁にある2段の段差は人工的なものであり外敵の進入を防ぐためもあると思われる。これらのことよりこの部分は池というよりも、用途、形状よりみて空壕Aの延長部分であると解する。桶状木製品については出土遺物の項で述べるが、細かな観察の結果桶であることが判明した。これは土台材を敷いて固定させて使用した置桶であると解する。井戸については深さ約80cmと浅いが、その形状、置かれている位置より地下水を汲み上げる掘井戸ではなく、川の清流を溜る溜井戸と解する。杭列についてはEPB-B'間においてゆるやかな水の流れが想定でき、井戸へ水を誘導するための施設の残存部と思われる。すなわち桶と池状遺構、井戸と杭列はセット関係にあり、同一層面であることから同時に機能していたと思われる。

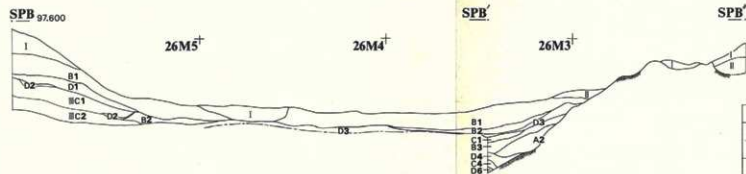
(斎藤邦典)



第20図 用水施設平面図

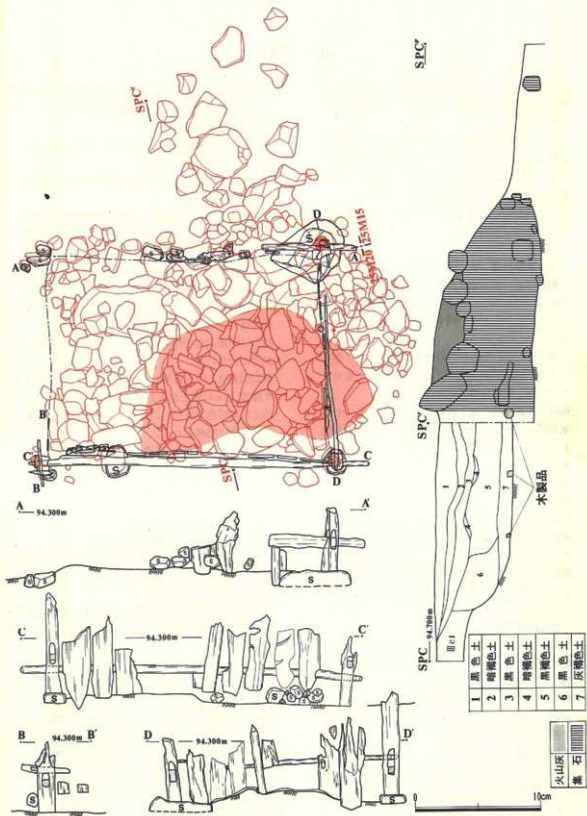


I	表土
II	暗褐色土
A	植物纖維層
B	灰褐色土
C	川砂
D	黒褐色土
EC	砂礫
h	黒色土
v	粘土層



1	黄褐色礫
2	黒褐色土
2'	灰褐色土
3	青褐色礫





SPC

SPC  
SPC  
SPC  
SPC  
SPC  
SPC

SPC

SPC

SPC 94.700m

木製品

1	黒色土
2	暗褐色土
3	黒色土
4	暗褐色土
5	黒色土
6	黒色土
7	灰褐色土

	火山灰
	礫石

第21図 井戸



### III 遺物

本調査で出土した遺物は、陶磁器、鉄製品、銅製品、石製品、骨角器、木製品、その他焼骨片、炭化物等である。

しかし、陶磁器をはじめ多数の金属器、木製品等総出土点数1万点を越えた、遺物廃棄場所である27K 2.7区の調査が昨年度で終了したため、本年度の出土量は、例年の半数以下にすぎない。尚、本年度出土の完形品は第22図2、3の鉄軸皿2点である。

#### 1. 陶磁器類 (第22図～24図)

##### 胎載磁器 (第22図4、第24図14)

掲載資料は第24図14の寺の沢内(25、26M区)より出土したものと第22図4の館神八幡宮周辺より出土したものである。

第24図14は高台基筒底の染付皿で見込み部に寿字文を有す底部破片である。胎土は淡灰白色を呈しやや精良、黒色微粒子の結晶を含む。

釉調は淡青緑色で施文の青料は薄い藍色を呈す。第22図4は青磁の香炉である。現存の破片より図上復原すると口径約9cm、器高6.5cmを測る。胎土は乳白色で精良、黒色微粒子の結晶を含む。釉調は漆緑色で外面と口唇内面に施釉される。

外面には刻線が二本1単位として口縁部、胴部、底部に横走し、脚部にも寛削りの文様が施される。未掲載のものでは主に館神八幡宮跡周辺部より出土したものに白磁の杯、小皿、染付の小皿、碗、青磁の小皿、盤、碗、赤絵わん等の小破片がありこれまでに掲載した資料と同様の器種、文様ばかりである。

##### 国産陶器 (第22図1～3)

掲載資料は瀬戸・美濃の灰釉小皿(第22図1)鉄軸小皿(第22図2、3)、越前系の播鉢(第24図15)、甕、壺(第23図10、11)である。第22図1は、口径9cm、器高2.4cmの高台を有す小皿である。胎土は淡黄褐色でやや粗、釉調は淡緑色で器面全体に気泡を有し(二次焼成の影響と思われる。)全面にかかる。

高台内部に輪状の重む焼痕を有す。第22図2は口径11.3cm、器高2.4cmの高台を有す小皿である。口縁部端反りである。胎土は暗灰色で粗、釉調は黒褐色で内面と口縁部

の外面までかかる。施釉された部分は気泡がみられ露胎する部分は炭化粒が付着している。

見込みに重む焼痕を有す。

第22図3は口径9.9cm、器高2.3cmで糸切底の小皿である。直立口縁を呈す。

胎土は淡黄褐色で粗、釉調は黒褐色で口縁部内外面のみ施釉される。

第24図15は播鉢胴部下半の破片で寺の沢内より出土したものである。胎土は乳黄色で乳白色の結晶を含む。卸し目は各単位の間隔がなく重なり合っている。又さほど摩耗しておらず溝内に多少炭化物の付着がみられる。

第23図10は、図上復原によると口径28.8cm、胴部最大径約36cmの甕と思われる。

胎土は淡赤褐色で無釉である。胴部にへら描きの記号が付される。

第23図11は、図上復原によると口径約17cm 胴部最大径27.2cmの壺と思われる。

胎土は黒灰色で乳白色の結晶を含む。釉調は淡黄色で外面に施釉される。

未掲載資料は瀬戸、美濃の灰釉小皿、碗、鉢、鉄軸の小皿、碗等が主で、その他唐津、かわかけ、そして近世に致る製品も若干含まれる。

#### 2. 石製品 (第22図～24図)

##### 硯 (第22図5～7、第24図16、17)

第22図5～7は館神八幡宮周辺部(23K、J区)より出土したもので、第24図16、17は寺の沢内より出土したものである。

第22図5は、幅2.1cm、厚さ1cmを測るが長さ現存で4.9cmを測り約3分の1を欠損するミニチュア製品である。

掘り込みは両面にあり幅1.4cm、深さ0.7cmを測る。石質はスレートで色調は淡黒色。

第22図6は5と同様にミニチュア製品で欠損品の為長さは不明、幅2.1cm、厚さ0.6cmを測る。掘り込みは片面だけで全面成形は念入りな研磨がなされている。石質はスレートで色調は淡黒色。

第22図7は、集石(石垣状遺構や石積階段部)中に混在していたものでひどく破損している。現存の破片から想定される長さは約14.5cm、幅7cm、厚さ0.9cm以上を測る。

7cm、厚さ0.9cm以上を測る。

掘り込みは両面にあり、使用面と思われる片面は中央部が若干損耗している。石質はスレートで色調は淡黒色。

第24図16は、長さ不明、幅40.8cm、厚さ1.4cmを測る。

掘り込みは片面にあり全面成形は念入りの研磨が施される。石質はスレートで色調は淡灰色。

第24図17は赤味がかかった淡灰色を呈すスレートで使用面と思われる掘り込み部分は破損している。残存面は念入りの研磨が施されている。

砥石 (第22図8～9 第23図12、第24図18)

第22図8～9、第23図12は館神八幡宮周辺より出土、第24図18は寺の沢内より出土した。

8は使用面が2面で皿状の凹みを有している。

9は使用面が2面で両側端部にある。

12は断面形がほぼ五角形を呈す棒状のもので使用面は1面である。

18は使用面は2面でその1面は幅約1.7cmの側端部である。

石質はいずれも凝灰岩質のものである。

石臼 (第23図13、14)

13は下臼で破損がひどいが磨面に6本の鉋目と側部にひき手を差し込む穴の一部が残っている。

14は茶臼の下臼である。全面に念入りの研磨が施されている。磨面には8条単位の鉋目を有す。

石質はいずれも安山岩である。

その他の未掲載資料で上記以外の製品は羽口の小破片が多少あるだけで他に製品として想定されるものはない。

### 3. 鉄製品 (第24図下19～27)

本調査で出土した鉄製品は館神八幡宮周辺からのものである。

19～20は鉄鍋の口縁部破片である。

19は吊耳を有す部分で口縁はゆるく外反する (勝山館Ⅳ第14図31と同タイプ)

20は19よりやや薄く、頸部がくの字に外反する。(勝山館Ⅱ第16図45あるいは46の内耳を有すものと同タイプ)

21は完形品で用途不明、細長い鉄板材の一端をまるめたものでカギ (鉤) 等の対になる部品と思われる。

22はカギで頸部を若干欠く。角柱の鉄材を利用、23は本例の中ではやや大型のカサガイ (鑑

である。1端の尖端部が若干弯曲しており1度打ち込んだ後にぬきとったものと思われる。

24はヤス (箒) と思われる。勝山館Ⅱ第16図36に類似する。

25は火箸の欠損品と思われる、頭部と尖頭部を欠く。

26～27は小札で、26は連結したもので皮部を残している。

28は鉄環で21と同様の細長い鉄板材を利用している。径が4cm前後のやや楕円を呈すものである。未掲載の資料には他に釘、その他不明なもの等があるが鉄鍋の破片が多い。(藤田 登)

### 4. 木製品 (第25図1～第28図22)

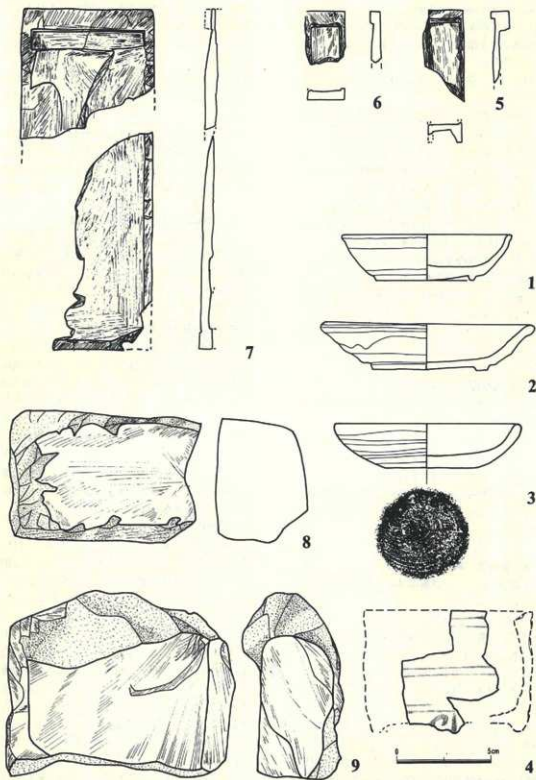
すべて寺の沢地内の用水施設出土区よりのものである。382点の出土がありその種別は食膳具80点 (漆器、箸)、住 (日常用具) 13点、建築部材67点 (桁等)、武器? 2点(弓?)、その他用途不明101点である。

杭 (第25図1～7)

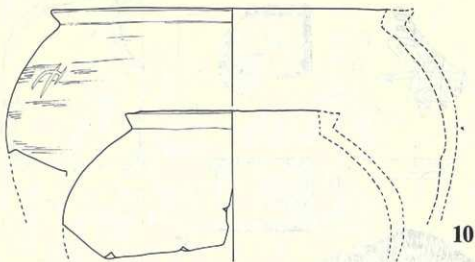
杭列を構成するそれぞれのものである。すべて上部が腐朽あるいは欠損している。すべての杭は丸木を用いており鉋状の工具でていねいに削り出しを行なっている。1の先端部は一方よりの削り出しである。他のものに比し小型である。2もほぼ同様の作り方であるが、他に小さな3面の削り出しを行なっている。3～7は1、2とは形状が異なり4面～5面の削り出しを行なっている。最小のものは1で長さ32cm、太さ4.4cm、最大のものでは7で110cmに達する。

その他の木製品 (第26図8～15) (第28図21)

8～10は箸である。C類に属する(註1)。11は先端がやや鋭角で細く薄い板材で札状のものとして推される。12は保存状態が極めてよい板材である。縦に割れているが、上部は図上左より、下部は右より樹皮を用いて留めてある。補修したのだろうか。裏表面とも多数の擦痕が横走する。用途は不明である。13は漆器柄である。外面に植物文を施す。今まで出土したものと同様に黒漆塗に赤漆の植物文、内面は赤漆塗である。14は隅丸方形の小型の桁材である。左右両辺に左は裏面右は表面に交互に細い段差を有する削りを縦に入れる。用途は不明。15は弓か。隅丸の扁平な棒で一端は欠損しているが、もう一端は丸味をもたせ、さらに扁平にし挿入を入れる、この挿入部分につ



第22圖 陶器、石製品 (館神八幡宮跡)

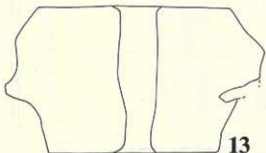
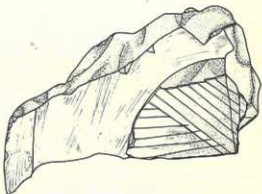
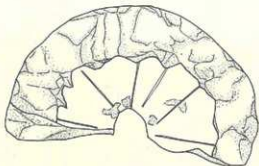


10

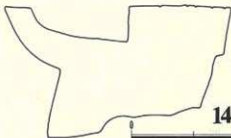
11



12



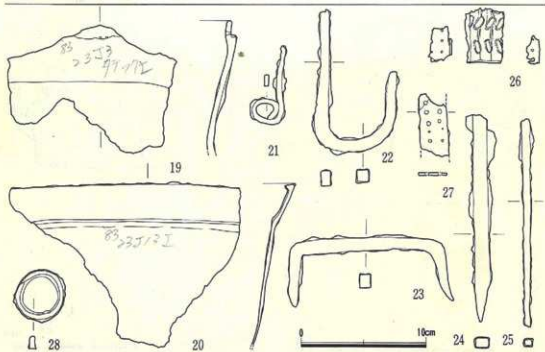
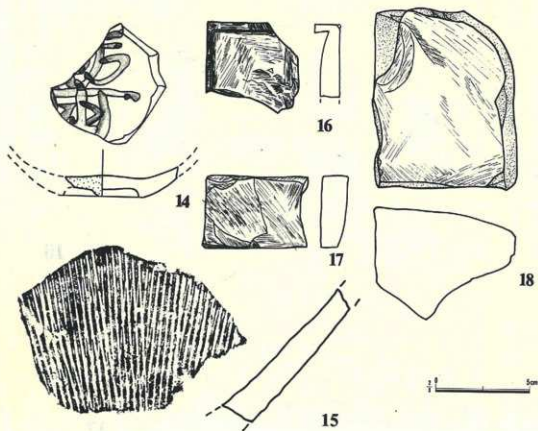
13



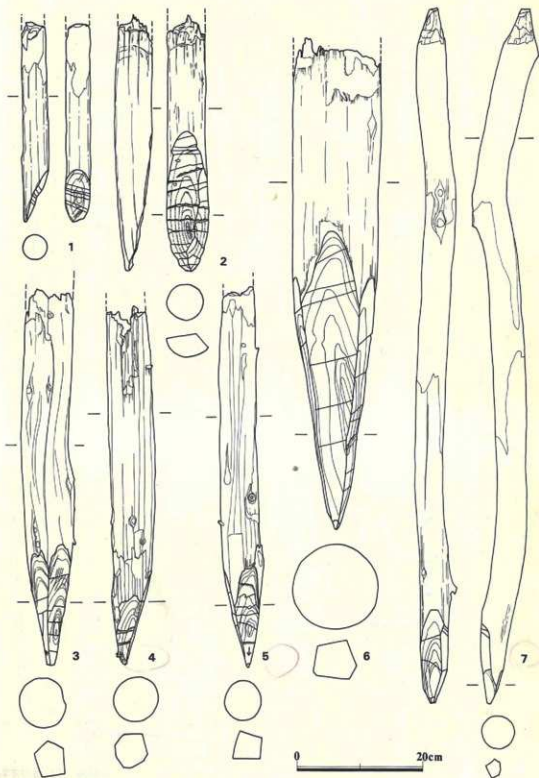
14



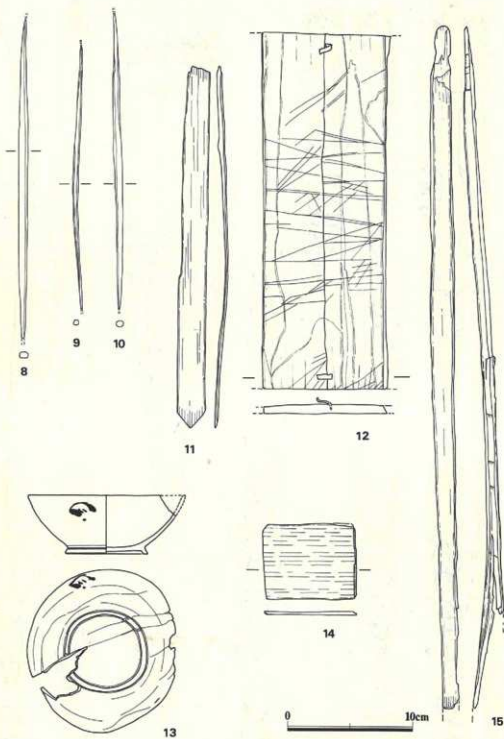
第23図 陶器、石製品 (館神八幡宮跡)



第24図 上、陶磁器、石製品 下、鉄製品



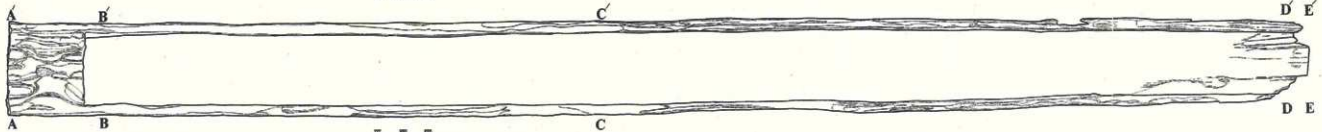
第25回 木製品(枕)



第26図 その他の木製品



正側面圖



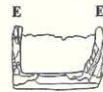
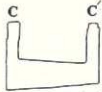
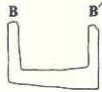
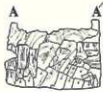
平面圖



正側面圖



縱斷面圖



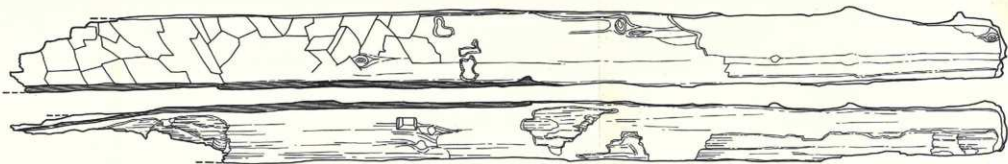
橫斷面圖

22

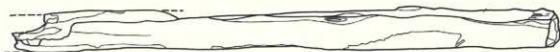


象牙器 木製品 (種)





18

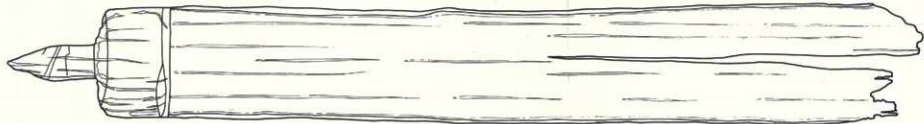


19

0 20 cm



20



21

るを巻いて使用したのであろうか。21は幅の3m 60cm程西方向において出土したものである。先端は14cm程細くとがらせさらに10cm程のなだらかな盛り上がりの後、先端まで扁平に削り出す。15は残存長54.5cm、幅1.8cm、厚さ1.0cmである。21は残存長146.6cm、幅18.2cm、盛り上がり部分の厚さ7cm、平坦面2.2cmである。縦におびただしい亀裂が入っており、乾燥、収縮の後水浸状態になったと推される。

#### 種 (第27図22)

1本の木で作られている。内部を四角にくり抜き、基部を直角に立ち上げ、先端部は立ち上がりをもたない長方形の箱形のものである。外面の整形は鉋等の工具で大まかな整形後基部(A~A')、右側面、左側面は手斧状の工具でいねいな削り出しがなされている。その削り出しは各部位ごとに一定の方向性がみられる。右側面は上部が全体的にかなり摩耗しており、明確でないが、基部から中央部にかけては左上より右下へ、先端部に近いところでは右上より左下へ削り出しを重複させるように行っている。左側面は基部付近は右上より左下へ細かな削り出しを行ない、さらに左上より右下へ、中央部付近はほぼ水平に左より右へ、先端部は右上より左下、さらに左上より右下へとそれぞれの部位により削り出しの方向性が見られる。基部断面(A~A')ではほぼ右上より左下の細かな削り出しを行なっている。縦断面に

よると中央部平坦面はほぼ水平であるが、横断面ではB~B'間では右から左への傾斜、C~C'間では左から右へ若干の傾斜を有している。さらに先端部形状は左右両側縁は欠損するが中央部底面は直角に切断されていた。また底面裏側は斜めに下から上への削り出しを行なっている。これらの観察の結果、特に先端部の形状等により種であることが判明した。全長4m 85cm、幅36cm、高さ25.4cmを測る。

#### 種の土台材 (第28図16~20)

いずれも建築材を再利用したものである。16はかなり大型の板材である。長さ136.6cm、幅58.4cm、厚さ16.4cmを測る。中央には24cm四方の方形のほぞ穴を有する。長辺側面には手斧状の工具でいねいな削り出しを行なっている。17は先端部を枕状にとがらす角材である。先端は6面の面取りを施している。中央部側面に二つの小さなほぞ穴を有する。反対側へは突き抜けない。18は角材である。一側縁及び左側上面を手斧状の工具で削り出している。17と同様中央に小さなほぞ穴を有する。反対側へは突き抜けない。19はやや扁平な角材である。土台材の中で最も小型である。縦87.4cm、横13.4cm、厚さ6.4cm。20は一端上部を内側へ直角に、下部を斜めに削り出している板材である。保存状態は比較的良好である。(斎藤邦典)

#### 註1 勝山館跡Ⅳ 拙稿

## Ⅳ 遺構、遺物における小括

### 1. 遺構

過去3ヵ年(55年、57~58年)にわたる郭内の発掘調査で、無数の柱穴(その中には数棟の建物配置を想定できるものもある)をはじめ、溝遺構、櫓列、石列、土壇、そして竪穴遺構等を検出した。これら各遺構は、階段状の構造を呈する郭内に点在するがその中における重複関係も数多く極めて複雑な分布状況にあって、館構築時に存在する建物の配置(各遺構の共存関係)を把握するにはさらに時間を要すると考える。その分布状況(附図1、2)をみると、これまでの調査では5段~6段の平坦地を確認し、北側へ下る低地になると平坦地面積も数倍の広さを有す。

前項でも述べているが郭内には中央部を南北に走る自然研究路があって、階段状平坦地はそれをはきんで東西に分離して存在する。

まず研究路東側では、頂部平坦地に柱穴群(柱列も含む)櫓列1、溝遺構3、その他に近世期の石積の階段がある。

第2平坦地に櫓列1、土壇1

第3平坦地に櫓列1、竪穴1

第4平坦地に櫓列7、竪穴4以上、柱穴群(柱穴列を含む)。尚、当平坦地は2m幅のトレンチ穴内において検出した。

第5平坦地(55年度調査区)には柱穴群(柱穴列を含む)、溝遺構1、竪穴1を検出している。研究

路西側では、頂部平坦地に掘立柱建物跡1、土壌1、その他に近世期の礎石建物跡1、柱穴列。第2平坦地に掘立柱建物跡1、小規模柱穴群(柱穴列を含む)、溝遺構1、竪穴2、土壌1、第3平坦地に欄列1、柱穴群(柱穴列) 竪穴3、第4平坦地に欄列1、柱穴群(柱穴列)、溝遺構2、竪穴4、土壌4、(プラン確認のみ)、第5平坦地(55年度調査区)に掘立柱建物跡1~2、柱穴群(柱穴列)、溝遺構2、竪穴2、第6平坦地(55年度調査区)に掘立柱建物跡1~3、柱穴群(柱穴列)、溝遺構5~6、竪穴遺構7、を検出している(附図1参照)。

以上の各遺構については、規模あるいは性格が不明なものが多い現状にあり、特に無数の柱穴を検出しながらも、柱穴列のほとんどが調査区域を越えて延びており、建物のおおよその棟数は把握できても、各々の建物の配置を把握するまでには至っていない例が多い。つまり今後さらに広域な調査区を設定し不明な部分の解明が必要視されよう。本項では、そうした中から特に、掘立柱建物跡と竪穴遺構についての諸特徴をまとめ、小稿にしてみたい。

#### a. 掘立柱建物跡

本遺構は昨年度検出した1号と2号についてはほぼその規模を把握する建物の配置を検出したが他にあげる55年度の検出による柱穴列は、おおよその規模から建物として想定するにすぎない。しかし、柱間の計測資料として数例掲載した。以下に各建物の規模について述べる(第29図)。1号は西側の1間(4.95尺)を庇とすると東西(桁行)5間、南北(梁間)2間の細長い建物で棟方向はN31.5°Wを示す。

面積は41.7㎡(約12.6坪)となる。

柱間は桁行で庇の部分を除くと西より6.6尺、6.6尺、6.2尺、6尺、6尺で平均6.3尺となり、梁間6.3尺の等間となる。

2号は(北側の庇と思われる柱穴列は除くとして)西側に庇を有するもので東西(桁行)2間、南北(梁間)3間となる。

棟方向はN38°Wを示す。(1号とは、6.5°のずれがある)。

面積は51.5㎡(15.6坪)となる。

柱間は桁行2間が13尺の等間で梁間は南より6.6尺、6尺、6尺で平均6.2尺となる。

本建物は1号よりやや大型で桁行の柱間は1号のそれに比べても倍の数値を示している。又、内柱も少なく、内部で重複する柱穴がほとんどなく対応する柱穴は検出されなかった。

3号としたものは小規模な建物で、1号の北側、第3平坦地に位置する。

規模は東西(桁行)3間、南北(梁間)1間となり庇はもたない。

棟方向は1号と一致する。

面積は19.3㎡(6坪)となる。

柱間は桁行が西より7尺、7尺、4.8尺となり平均6.2尺で梁間1間は11尺となる。

柱穴掘り方は前例(1号、2号)よりも小規模で柱痕も認められない。そのため柱間の計測には柱穴の中心によった。それによる計測値の誤差は多少生じるが平均値をみると1号や2号と一致する数値を示している。

以下に述べるものは55年度の調査で検出されたもので、いずれも柱穴の配置から建物を想定し計測値の参考資料に加えた。尚、説明上便宜的に4号~6号と呼称した(第29図左)。

4号は3号より北側へ約30m離れた第5平坦地に位置する。

東西(桁行と思われる)方向の柱穴列は西側の未調査地域外へ延びており不明である。

南北3間は梁間として、柱間は平均3尺の等間でちょうど1号、2号の2分の1の規模である。

現存から建物を想定すると桁行は4間~5間を有するものと思われ、桁行の柱間は等間とみても12.7㎡(約4坪)前後の極めて小規模な建物である。

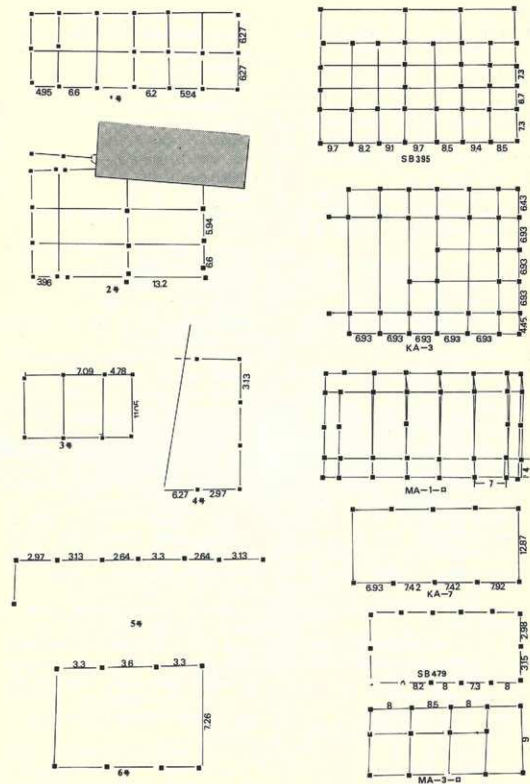
棟方向は2号とほぼ一致する。

柱穴の掘り方は1号、2号よりやや小規模だが、各柱穴内底部には板状の経15cm程の礎を置いている。

5号としたものは東西方向に延びる6間の柱穴列のみでこの配置より建物を想定するには無理があったが桁行として計測すると西から3尺、3尺、2.6尺、3.3尺、2.6尺、3尺の5間で平均3.4尺となり、4号に近い数値を示す。

柱穴列の方向はN28.5°Wを示し、4号とは、10.5°のずれがありほぼ真北に近くなっている。6号は近接して北側に位置する。

規模は4号に近いもので、東西(桁行)3間、南北(梁間)1間となる。



第29図 掘立柱建物跡模式図 (左、勝山館 右、東北半部)

棟方向は1号と一致する。

面積は、7.04㎡（2坪）となり、柱間は桁行3間、（3.3尺）の等間で、梁間7尺1間である。

以上、計測値を算出できた建物跡は6例である。それによると柱間寸法には6.2尺のもの（1号～3号）と約3尺のもの（4～6号）とがある。

前者の6.2尺3棟は頂部平坦地から第3平坦地（館後方の高位置）にあり、後者の3尺3棟は第5平坦地から第6平坦地（館前方の低位置）の柱穴が密集する広い平坦地にある。

つまり、大規模な建物（主屋的なもの）が高位置の狭い平坦地に単独で存在し、小規模な建物は低位置の平坦地に密集する感じで存在することが想定される。

面積の比較によると、主屋の大規模なものは、42㎡（13坪）～52㎡（16坪）となり、小規模なものは、13㎡（4坪）～19㎡（6坪）となる。

ただし、6号とした建物は面積がわずかに2坪程度であり、柱穴の配置から想定すると櫓あるいは門と考えられるものである。

尚、検出した中で柱穴間の切り合いは数多く確認したが、建物跡の検出が極めて少ないこともあり、新旧関係を確認できる建物はない。（勝山館Ⅱでは平面形が円形のものど方形のものとの重複関係において、前者が古いことを述べている）。

以上勝山館における掘立柱建物跡の規模から柱間数あるいは柱間寸法を述べてきた。

次に他地区における同建物跡の規模について概観し、勝山館との比較検討をしてみたい。

まずは東北方面の検出例からふれてみたい。

今日では各地で調査が行なわれ、更に継続されている所もあり、資料としては膨大なものとなっているようである。

その中から、検出状況が極めて明らかなものを時期別に数例あげてみる。

15世紀頃とされている丸子館（岩手県）で検出されたものは、大規模なものでは、桁行7尺～7.5尺間で5間、梁間8尺間で2間となる。

床面積は75.6㎡（23坪）を有す。

棟方向N93.5°Wを示し四面に庇がある。

小規模なもの（HA-3）では桁行8尺～8.5尺間で3間、梁間は9尺1間となる。

棟方向N92°Wを示し北側に庇がある。

床面積は20.3㎡（6坪）を有す。

16世紀とされている鹿島館（岩手県）においても主屋的な大規模の建物と小屋的（仮小屋、物置）な小規模の建物とが検出されている。

大規模なもの（KA-3）桁行が7尺間で5間、梁間は7尺間で3間となり、西側と南側に庇がある。床面積は126.7㎡（38坪）となる。

棟方向はN27.5°Eを示す。

小規模なもの（KA-7）は桁行7～8尺間で、4間、梁間は13尺間である。

床面積は35㎡（10.6坪）となる。

棟方向はN33.4°Eを示す。

16世紀後半頃とされている浪岡城、根城（青森）についてみると、

浪岡城では（SB 02）桁行6.6尺間で4間、梁間7尺間で3間となり四面に庇がある。

床面積は99.13㎡（30坪）となる。

棟方向はN18°Wを示す（梁間）。

根城跡では60棟をこえる数で検出され、規模の明確なもの43棟が報告されている。

それによると桁行が1間のものから21間のものまで数種類、数形式にも及び建物がある。それらの柱間平均寸法は桁行6.5～7.3尺、梁間6.2～7.8尺となっている。

その中には主屋の建物から物置、倉庫的なものや門あるいは櫓的なものなども含まれている。

次に道内における検出例をあげると、近隣では58年度より調査が行われている函館市史跡志海苔館がある。その構築年代は14～15世紀頃とされており、周囲に土堤が廻りその内部には、大規模な掘立柱建物跡、溝遺構、井戸跡等が検出され、外部には掘が廻っている。志海苔館による大規模な建物の柱穴列はほぼ南北方向を示し、柱間は平均、3.25m（9.8尺）を測るものである。

この建物についてはさらに継続調査（59年度）が控えており後に全貌が解明されることであろう。

以上が14世紀～17世紀初頭頃までの各地の建物跡の概略である。それをまとめると、14～15世紀頃の例では9.8尺（約10尺）を測り、15世紀全般の例では7～8尺を測り、16世紀頃の例では平均7尺を測り、16世紀後半以降の例では6～8尺を測るものとなる。

このように、形態的あるいは規模的変遷より推考してみると、時期がくだるに伴い大規模型建物は減少して小型化され、形態の変化が目立ち始める。

(たとえば梁間1~2間型式のものが4~5間型式のものも加わる。又単面にみられた庇(北庇)も複数面に庇を有するものが加わる。)

前記の例では根城のように数種類もの型式に分類されるものがあり、規模も柱間1間が6尺以下のものから8尺を超えるものが混在してくる。つまり単型式のものから徐々に複数の型式が増大していく傾向がみられる。

又、この建物様式の変遷を1集落跡の中でとらえられている例もある。

それは、山口県下右田遺跡によるもので、中世農村集落が中心となる遺跡である。

その时期的幅は平安時代後期より室町時代末期におよぶものとされ、およそ252棟の掘立柱建物跡を主とした時代区分がなされている。

その中からまず掘立柱建物の棟数についてみると、「平安時代16.3% (40棟)、鎌倉時代22.8% (56棟)、室町時代28.6% (70棟) となる。

建物規模や床面積は、時代がくだるにつれ小規模化の傾向を示す……」とあり、時代別にみた柱間の平均値桁行をみると、平安時代が2.11m (7尺3分)、鎌倉時代2.14m (7尺1寸)、室町時代2.16m (7尺2寸) となる。

さて、このことから勝山館より検出された建物跡との比較をし考察してみたい。

勝山館の建物配置による計測値では1間6.2尺を測るものが最大なものである。小規模なものでは1間3尺を測るもので他地区の建物の中には6尺以下の数値を示すものは極めて少ない。こうした建築様式の変遷から、本建物跡の構築時期を想定するならば、16世紀後半頃の浪岡城、根城に比較してみても多少新しい時期に位置するものと考えられ、16世紀後半頃にとらえることができるが前回の勝山館Ⅳ (1983) では、陶磁器の変遷により勝山館の年代を16世紀中葉としており、これらの遺物に伴う遺構と考えるとその上限はおおよそ16世紀中葉まで遡ることも想定される。

#### b. 竪穴住居様式

今日、東北方面を中心に各地で行なわれている中世館(城郭)の調査により、掘立柱建物跡と共に必ず検出される竪穴住居様式は増大している一方、その性格についてはまだ不明なものとなっている。勝山館では、今年度新たに14基が確認され、過去3度に及ぶ調査で検出のものを合計する

と30基となる。(附図1、2)

本調査で検出した竪穴住居様式(以後は竪穴と呼ぶ)は、調査域外に延びるもの、プラン確認のみに留めたものを除いた12基を調査した。本項では、過去に調査したものも含めて、勝山館における中世遺構との縦の関係について、そして、竪穴の分布状況からみる特質についてのこのふたつについて課題を提示して推考してみたい。

#### 形態的分類(第30図~31図)

竪穴には平面形が長方形を呈するものと方形を呈するものがあり、前者を第1類、後者を第2類とした。(第30図)

第31図A、Bは、両者の集計と、長径、短径による分布を示している。

第1類はわずかに3基でそのうち1基は未調査(プラン確認のみ)、他の2基は複数の建物と重複しており不明な部分が多い。その中で舌状の張出しを有するものは2基ある。

第2類には、a類として舌状の張出しを有するものb類として舌状の張出しを有しないものがある。

さらに両者は柱穴の有すものをa<sub>1</sub>類、b<sub>1</sub>類とし、有しないものをa<sub>2</sub>類、b<sub>2</sub>類とした。

規模は、第1類は3~5mを測るもので、第2類は2~4mを測る。しかし、両者を総合すると2~2.5m前後のものが多い。

深さは、後世の擾乱あるいは重複関係から壁が消滅しているものを除くと、20~30cmを測るものと60~90cmを測るものがあり特に後者が多い。

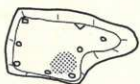
勝山館においては第2類が主流をなすことから、以下は第2類について述べてる。

a類は9基を数え、規模は3m近い2号を除けば全て2.5m以下のものである。又、平面形が正方形でなく必ずいづれか一辺に20cm前後の差異があるものも含まれている。

内部構造は、a<sub>1</sub>類としたものは8基でa<sub>2</sub>類としたものは1基である。a<sub>1</sub>類には6本柱穴と8本柱穴がある。

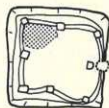
6本、柱穴を配するものは、1号、2号、15号で、8本、柱穴を配するものは、13号、20号(19号)、25号、26号がある。

1号には東側壁際の中央部に柱穴様ビットが1個あるが、それに対応するものはないので6本柱穴を基本とするものとした。



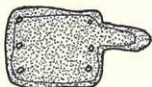
1類

1号 200 X 180 X 76

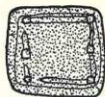


2類

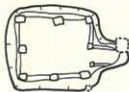
270 X 260 X 80 24号



2号 230 X 220 X 22



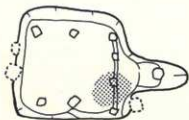
210 X 180 X 82 12号



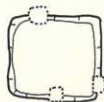
25号 260 X 240 X 80



230 X 220 X 90 16号



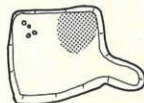
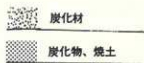
13号 240 X 230 X 86



240 X 230 X 80 11号



9号 350 X 260 X 64



250 X 230 X 68 4号

第30圖 壑穴模式圖 (勝山館)

13号は6本柱穴を基本としたものだが、出入口付近に2個の柱穴椽ビットを配する。

20号(19号を含む)は整穴の一部が調査区域外に延びているが、現存の柱穴配列より8本柱穴が想定される。

6本柱穴と8本柱穴には若干の相異点が認められる。それは3個1単位の柱穴列方向と舌状の張出し方向との関係である。つまり、舌状の張出し方向に直交した配列をみせるものは6本柱穴にあり、同一方向に配列するものは8本柱穴にある。

次に、周溝を有するものと有しないものがあり、者には全周するものは少なく、後者は6本柱穴に限られた。

周溝は、舌状の張出し部分のみみられるもの(19号、20号、26号)と柱穴列に伴うもの(13号)、ほぼ全周するもの(25号)がある。

$a_2$ 類としたものは4号のみである。当整穴は舌状の張出しが北東のコーナー部分に有するもので他に例がない。

床面上に地床炉(焼土及び炭化物)を所持するものは、 $a_1$ 類、 $a_2$ 類の両者にみられ、 $a_1$ 類では1号、2号、13号、19号と、 $a_2$ 類の4号である。

そしてその位置は、いずれも舌状の張出し部分寄りにあり、その左右いずれかにある。

床面上での出土遺物は、1号の炭化物(下部に地床炉がある)上面に鉄鍋1点(口縁部を欠いた半完形品)のみである。

$b$ 類の内部構造は、 $b_1$ 類としたものは3号、12号、16~18号、24号で、 $b_2$ 類としたものは11号、21号である。 $b_1$ 類には6本柱穴と8本柱穴がある。

6本柱穴を配するものは3号、12号、17~18号で8本柱穴を配するものは16号、24号である。

3号は5個の浅いビットを壁際に配しており、6本柱穴の可能性はある。

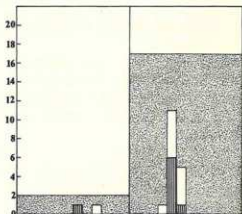
17~18号については重複関係等で消滅した部分が多く2~3本の柱穴を残すだけであり、現状では6本柱穴の可能性があるとしかいえない。

24号は柱穴の配列にやや乱れがある。

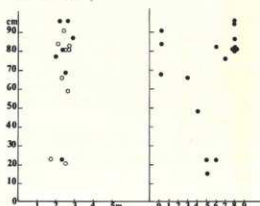
周溝を有するものは12号、17号、24号で17号を除くものは全周する。

周溝を有しないものは3号、16号、18号である。

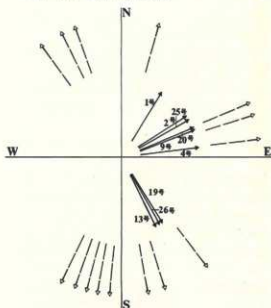
$b_1$ 類においては、 $a_1$ 類にみられた柱穴の数と周溝の有無の関係については明らかな差異はみられない。



A 種類別集計



B 長径・単径による分布



C 舌状・張出し方位

第31図 グラフ及び舌状張出し方向図



b<sub>2</sub>類としたものは11号、21号である。尚、a<sub>2</sub>類、b<sub>2</sub>類においては、竪穴の外周に柱穴様ピットは確認されなかった。

地床炉を所持するものは、12号、24号 (b<sub>1</sub>類) の2基である。その位置はいずれも北西部側のコーナー寄りである。尚、第31図Cは舌状張出しの方向を示している。勝山館では主に北東あるいは南東に集中する。

各竪穴の堆積土の状況についてみると、比較的単時間に堆積したと考えられる60cm以上の厚い粘土層主体の堆積土を有するものが大半をしめる。この現象は深さ20cm前後の浅い竪穴である2号、3号、15号等を除くといずれにもみられるもので、未調査でプラン確認に留めた竪穴 (5号、6号、23号等) についても断面観察によって確認できた。この厚い堆積土は、粘性のある褐色土あるいは黄褐色土 (ロームブロックを含む) で、各種の遺構構築時に一挙に埋めもどされたと思われる。厚い堆積土は全体的に固くしまっており、特に4号、6号、11号等は竪穴壁面の区別がむずかしいものであった。

又、この堆積土中には、竪穴を掘削時にあげられたと思われる人頭大の礫 (ローム層下部の礫層のもの) が多数混在する例もある (6号、11号、13号、20号)。

そして、その上層にはソフトな暗褐色土が0~30cm程度堆積しており、さらにその上部を白色火山灰が薄く被覆している。出土遺物は主に火山灰直下あるいは暗褐色土上層部のものである。

以上の分類結果をまとめてみると、形態的特徴においては、舌状の張出しの有無で大きくふたつに分けられるが舌状の張出しの有無あるいは柱穴配列の差異 (6本と8本) によって形態の変化をみせる傾向はない。

規模についても同様で、竪穴群の主体をなすb類には3mを越えるものは検出されていない。

地床炉を所持するものは半数を上回っており、地床炉が確認されなかった中には床面や壁面の消滅した部分が多く原形を留めないものもあり、それらを加えるとさらにその数が増すものと思われる。深い竪穴のいずれにもみられる粘土質の厚い堆積土は、一挙に埋めもどされたものと思われるが、竪穴廃棄直後によるのか後に各種の遺構構築時によるものか、という問題がのこる。又、埋めもど

し直前には竪穴内部は地床炉 (炭化物) 以外には残っていないのもひとつの特徴である。

これまでに、勝山館より検出された竪穴の数あるいは配置状況については既刊の概報「勝山館Ⅱ、Ⅳ1981、1983、上ノ国町教育委員会」の中でも述べてきた。

これらの竪穴の舌状台地上にみられる分布の特徴は、低位置の広い平坦部あるいは、台地の縁辺部等にまとまるような傾向はみせない。

いわば等高線に沿って3~4基の竪穴が並ぶように配置している。つまり竪穴群の構築時の舌状台地上においては、段を有す平坦部がなかったことがうかがえる。たとえば、掘立柱建物跡の場合、数段の各平坦地に1棟~2棟の建物が規則的に存在する。中央分離帯的性格をもつ現自然研究路の西側に建物が並び東には2重~3重の柵を設けているだけである。又、舌状の張出しをもつ竪穴で構成するもの、張出しのもない竪穴で構成するものまとも等はみられない。

次に、この竪穴群の構築時期について推考してみた。

竪穴群と各種遺構との新旧関係はこれまでの調査においても明らかにされてきた。

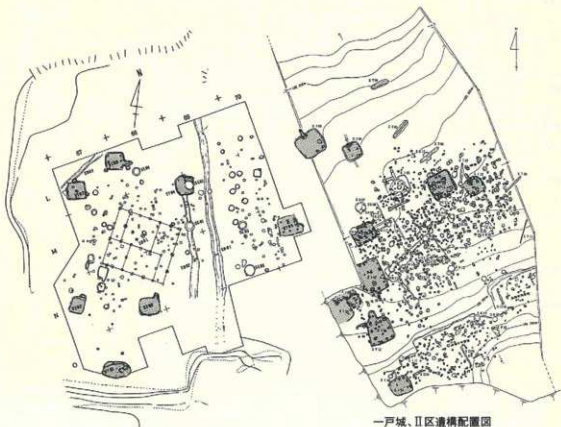
55年度の館前方面の低位平坦部 (17K・L区) における調査では、21号、2号、10号が溝遺構に切られていた。

4号、10号は掘立柱建物跡の柱穴に切られていた。57年、58年度の館後方面の調査では、11号~13号、16~17号、24~26号は掘立柱の柱穴に切られており、15号、17~18号、27号、29号は溝遺構に切られており、23号は柵列に切られている。

さらに、14号~18号等は地山の整形 (平地地造成のための) 時に削平され原形を留めないものもある。このことで明らかなのは、竪穴群は、中世館の各種遺構のいずれよりも古い時期に構築されたものであることが考えられる。

いかえると、竪穴群と各種遺構とは (館構築時のもの) 縦の関係にあることが想定される。ただ、両者の関連性、あるいは時間的な差についてはさらに新たな問題として残される。

結論的にいうならば、勝山館における竪穴群は、そのほとんどが日常居住用の住居として機能していたと考えた場合、当台地上において、階段状の平坦地を形成し掘立柱建物跡を構築する以前に、



浪岡城、東館遺構配置図

一戸城、II区遺構配置図



丸子館、Iの郭遺構分布図

第32図 遺構配置図 (東北半部)

一時期の間集落を形成したと考えるのが妥当であろう。その時期については、中世遺構の構築時期（16世紀中葉～後半）を下限としても、上限を明らかにするにはまだ十分な資料が得られていない。勝山館の竪穴住居様遺構と同じような状況を示す遺構が、東北地方北半にもみられるので、次に2、3の例に基づき比較してみる。

#### 配置状況の比較

第32図は浪岡城（青森）一戸城、丸子館（いずれも岩手県）の遺構配置図である。浪岡城では大規模掘立建物跡の周囲をかこむようにあり、一戸城では郭の縁辺部に集中しており、丸子館では掘立柱建物群の外周を廻るようにある。このように、竪穴群と掘立柱建物群との配置関係は、いずれも横の関係にあることが明らかである。

#### 形態・規模による比較

第33図は青森、岩手、秋田の各県下における中世城郭より検出された竪穴遺構である。

中でも代表的な例としては、青森県の浪岡城、根城で、いずれも数多くの竪穴遺構を検出しており、種類も多くバラエティーに富んでいる。

つまり、これら多種類の竪穴遺構においては、仮設住居、倉庫、家畜小屋、地下倉あるいは工房的なもの等のいくつかの機能が想定され、掘立柱建物跡に伴う遺構としている。

勝山館では、中世遺構との横のつながりがないことを明確にとらえてきたが、東北北半では、大半が横のつながりを前提とした遺構としてとらえている。こうした東北北半の竪穴遺構と呼称されるものは東北以南（長野県樋口内城館址、鎌倉等）においても検出されているが、その内容は類似した状況にある。道内では、調査継続中の史跡志海苔館において、大規模掘立柱建物跡とともに竪穴様遺構が確認されており今後の調査に注目したい。以上、勝山館における竪穴住居様遺構の特質について述べてきた。

これまで不明な点が多く残されていたなかで、勝山館では竪穴の機能あるいは用途といったものについてある程度ままとしほぼとらえてみた。ただ、残念ながらまだ断定しうる資料（特に共用遺物）に乏しく、いくつかの問題を残したことも事実である。

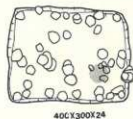
勝山館の郭内における調査は、まだ継続中であり、今後さらに新しい事実が見出せることを期待する



根城 Sii29 (青森)



浪岡城 ST30 (青森)



一戸城 S106 (岩手)



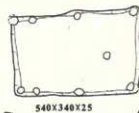
大瀬川館 Dji12 (岩手)



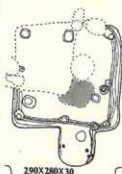
後城 Sii30 (秋田)



柳田館 Fgi100 (岩手)



丸子館 MBI (岩手)



根城 S142

第33図 竪穴模式図（東北北半部）

ものである。この小稱をもって、以上に提示した問題の今後における解明の糸口となれば幸いである。(藤田 登)

## 2. 遺物

### 古銭(寛永通宝)

昨年度の調査で館神八幡宮跡周辺より出土した約1,200枚を越える数の寛永通宝に注目し、勝山館Ⅳ(1983)において銭径、銭文の変化について概観し、ある程度分類を試みた。

今回は、前回報告できなかった数値的な内容をまとめてみた。

第34図は、古寛永(黒丸)、新寛永(赤丸)の分布を示している。

古寛永は、主に土堤上あるいはその内部に散布しており、小ブロックを形成する部分は、24K11、16区(西側土堤頂部)で、礎石建物跡(館神八幡宮跡)や石積の階段周辺等に集中する傾向はみられない。

新寛永は、発掘区全域に分布するが古寛永同様に、土堤上に小ブロックを形成する部分がある。

たとえば、24K2区(北側土堤頂部)、24K11、16区(西側土堤頂部)、24J21区(石積階段の南側)等である。

土堤内部では、礎石建物跡周辺部にやや集中する傾向がみられる。

寛永通宝は58年度分約300枚を加え1,500枚を越える数となった。第35図はその集計表である。

種類別の数値をみれば円グラフが示す通り、新寛永が65%を示すのに対し古寛永は10%程度である。鉄銭は4%を占めるが、当資料は錆の塊となつてしまい原形を留めているものは一枚もない。

ビタ銭は数枚重なった状態のものが多い。

第35図Aは新寛永、古寛永による量目の比較を表している。

古寛永の場合4g前後のものに集中しているが、3~4gのもの、5g以上のものも30~40%程度ある。これは、径寸値にも若干の幅があるものと思われる。

新寛永の場合は、昨年度の細分により10種類以上にも及ぶ銭形があり、それに伴い重さのパラつきが生じている。

それによると、3~4gのものが多く、次に5g前後のもの、2g前後のものとなっている。

第35図Bは同じく両者による径寸の比較を表わし

ている。古寛永は24mmのものが7割の数値を示している。新寛永は、量目と同様の傾向がみられる。その中で23~24mmのものが主体をなし、次に25mmのもの、22mmのものとなる。

第35図Cは新寛永の細分より、銭名毎の数値を示している。それによると、文銭が一番高い数値を示し、次にマ頭通、虎の尾寛、ハネ寛となる。それらに比し、佐銭、小銭、足銭、波銭等はわずか1~2%にすぎない。

その他として一括したものは主に背に文字を有しない例である。グラフではそれらを径寸値の差異によりその数量を色別している。色の薄い方から24mm、23mm、22mm、21mmとなっており、24mm、22mm(各40~60程度)が一番高い数値で次に23mm(33%)となっている。第34図下段は両者による径寸、重さの相関図である。

古寛永についてみると径寸幅よりも重量の幅がうまわり、よこばいする状態にある。以上、寛永通宝における数値的概観をしてきた。その中で古寛永についてみると、寛永初期の幕府規定による径寸26.4mm(8寸)、量目1匁(3.75g)と比較すると、若干の差異が認められる。まず量目においては、規定に達するものは約50%をしめるが、規定以下あるいは以上のものを合わせるとやはり約45%程度ある。

径寸においては、全体的に規定以下のものが24mm~25mmのものが70%を示す。

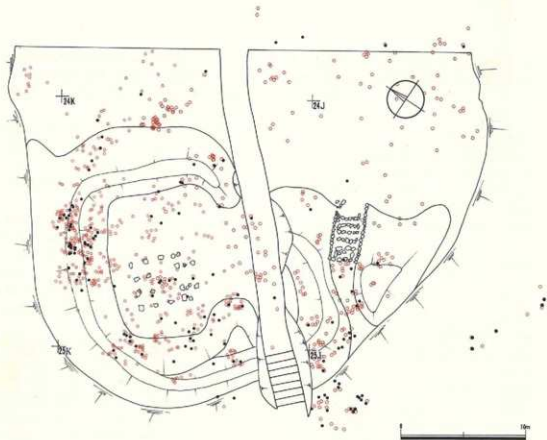
このことで明らかのように、古寛永においては、幕府の許可を得た正規のものは約半数程度で、規定以外のものも半数近く含まれている。

つまりどこか無名の鑄造地によるものと一緒に搬入していることが考えられる。

新寛永については、銭形、銭名の細分あるいは各銭貨の鑄造地の解明は、まだまだ不十分であり再検討を要するものである。

さて、本項及び昨年度(勝山館Ⅳ)の小項によって寛永通宝の小括を記してきたが、これについては今後更に整理分析を続けなければならない。

又、古銭には他に700枚以上のいわゆる渡来銭があり、それらの時代別：鑄造別分類、あるいは、道内では代表的な資料である志海若遺跡出土古銭との比較検討を行い、流通経路等の解明に努めなければならない。(藤田 登)



	10.0	20.0	21.0	22.0	25.0	24.0	25.0	26.0	
54			1	10	6	1	1		19
55	1		1	4	8	10			24
56			2	3	14	4	3		26
57	8	3	19	78	266	185	112	5	676
58			1	18	22	31	16	2	90
	9	3	24	113	316	231	132	7	835

a<sub>1</sub> 表1 新寛永年度別集計(径寸)

	22.0	23.0	24.0	25.0	
54			1		1
55		1	1	1	4
56		2	7	1	12
57	2	5	114	4	131
58	1	10	35	6	53
	3	18	158	12	201

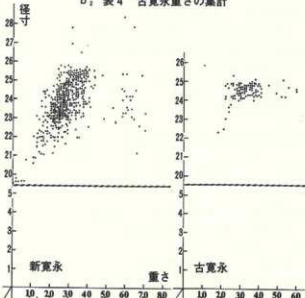
a<sub>2</sub> 表2 古寛永年度別集計(径寸)

	1	10	20	30	40	50	60	70	80	90	10	
57	34	64	421	261	22	15	19	2	2	1	2	102945
58			13	74	47	4						138
	34	64	434	335	69	19	19	2	2	1	2	102983

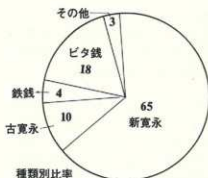
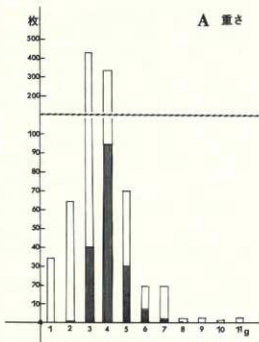
b<sub>1</sub> 表3 新寛永重さの集計

	10	20	30	40	50	6.0		
57	1	39	67	7	5	2		121
58		1	27	23	2			53
	1	40	94	30	7	2		174

b<sub>2</sub> 表4 古寛永重さの集計



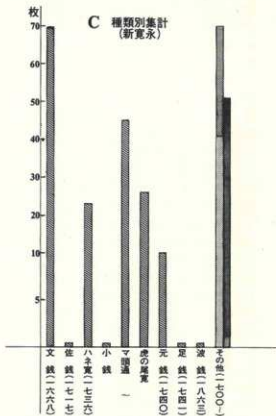
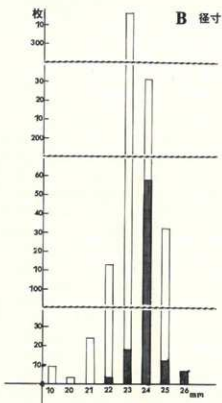
第34図 上、古銭分布図 下、集計表及び径重相関図



種類別比率

種類 年度	新寛永	古寛永	鉄 銭	ビタ銭	合 計
54	19	1			20
55	28	4			32
56	180	12	1	55	250
57	788	131	74	280	1273
58	221	53	8	21	303
合 計	1236	201	83	358	1878

表5 寛永通宝年度別集計



第35図 集計表及びグラフ

## 製鉄関係

本項ではこれまでに勝山館より出土した羽口・鉄滓の小括を行なうものであり、最後に勝山館周辺における鉄鉱石の産地を紹介する。

### 羽口

これまでに出土した羽口の点数は約50点を数えるが、その多くは小片であり、ある程度その器形の判るものは今回図示した8点である。その内の一点は勝山館に隣接した28J・K区で検出された池跡の黒色炭化物層より出土したものである。勝山館で出土する羽口の特徴は、右製羽口が比較的多く検出されることである。では順に紹介する。

1) 26J21区Ⅱ層より出土した吹口羽口基部である。2)・3)と同様の灰色の凝灰岩質泥岩製で、非常に軟質である。器形は円筒形であるが、基部から中間部に向かって若干開く逆テーパースタイルであると言える。基部直径は115mmで中間部直径は128mmである。羽口外面は金属工具による成形痕が全面に残る。加工方向は上下方向が主であるが、部分的に左右方向にも認められる。加工工具はその加工痕から刃部の幅が4cm以上の比較的幅広いものであると考えられる。空気孔は、基部では中央より偏した部位に穿ち、中間部ではやや偏した部位に穿つ。空気孔は基部に吹口空気吹出口を受けるソケット部が形成されている。これは中間部に向かって直径が減少するテーパースタイルを呈する。ソケット部の最大径は35mmで、基部から65mmの深さで最少径の22mmとなり、中間部の空気孔径と同じになる。中間部の空気孔は円筒状である。

2) 27K7区Ⅲ6・3層より出土した吹口羽口基部である。1)・3)と同様の淡黄灰色の凝灰岩質泥岩製で、非常に軟質である。器形はほぼ円筒形である。基部直径は108mmで中間部直径は110mmである。羽口外面は非常に滑らかであり、金属製工具による成形加工が行われた後、器面調整が行われたものと考えられる。空気孔は、基部では中央よりやや偏した部位に、中間部では、ほぼ中央部に穿つ。この空気孔は基部に吹口空気吹出口を受けるソケット部が形成されている。これは中間部に向かって直径の減少するテーパースタイルを呈し、ソケット部の最大径は35mmで基部から55mmの深さで最小径の20mmとなり、中間部の空気孔径と同じになる。中間部空気孔は円筒状である。

3) 26J21区Ⅱ層より出土した吹口羽口基部で

ある。淡黄灰色の凝灰岩質泥岩製で、非常に軟質である。器形はやや潰れた円筒状で最大径110mmでこれに直交する径は欠損するが、100mm前後であると考えられ、断面形は楕円となる。羽口外面は側縁に自然面を有し、金属製工具による成形痕が上下方向に残る。成形痕の再調整は認められず、刃部の幅が2cm以上の工具で成形したものと考えられる。空気孔はほぼ中央部の部位に穿ち、基部に吹口空気吹出口を受けるソケット部が形成されている。ソケット部の最大径は35mmで基部から中間部に向かって直径の減少するテーパースタイルを呈し最小径は21mmとなり中間部の空気孔と同じ径になる。ソケット部にはこれを穿つための上下方向に幾条もの断面半円形ないし不定形の粗雑な加工痕が残る。

4) 27K2区Ⅲb層より出土した吹口羽口先端部である。粘土製で、先端部火元以外は非常に柔らかく、ブラッシングすると水に溶ける程である。胎土はきめ細かい黄灰色粘土で火元に近くなる程赤味を増す。器形はほぼ円筒形であり、羽口外面に若干成形痕がある。先端部直径は103mmで、空気孔はこのほぼ中央に穿ち、この直径は22mmである。羽口外面は火元近くでは暗灰色を呈し、空気孔の先端部より内面3cm程は暗い赤褐色を呈し、熱による膨張のためか大きな亀裂が入る。羽口先端部は多孔性のガラス質溶解物が付着する。付着物の表皮は暗緑灰色または黒色を呈し、破面は黒色を呈する。付着物の厚さは約1cm程である。

5) 26M4区ⅢC・2層より出土した吹口羽口である。きめの細かい粘土製で胎土は軟質である。器形は先端部に向かって細くなるテーパースタイルを呈し、残存部最大径は100mmで先端部径は95mmであり、全長は285mmである。羽口外面は側縁に破面を有するが真円に近く、良く整形されている。先端部断面形は空気孔に対し80°の角度を持って傾斜する平坦な面を穿つ。空気孔は中央よりやや偏した部位に穿つ。空気孔基部に吹口空気吹出口を受けるソケット部が形成されている。最小径は20mmであり空気孔と同径である。深さは110mmである。最大径は欠損しているが、図上で復原すれば35mm程と思われる。ソケット部にはこれを穿つため上下方向にやや雑な加工痕が残る。羽口先端部は加熱により細かく割れ多孔性のガラス質溶解物が付着する。付着物の表皮及び破面の色調はやや

緑がかった暗灰色ないし黒色を呈する。付着物の厚さは薄い。空気孔の先端部より内面1cm程は暗い赤褐色を呈する。

6) 26 K区より出土した吹口羽口先端部である。砂礫を若干含み、破面に草痕を有する粘土製で、胎土は良くしまり焼成も良い。先端部は空気孔に対し45°の角度持って傾斜する面を有する。傾斜面はほぼ平坦である。先端部直径は102mmで、空気孔はほぼ中央に穿ち、直径は20mmである。羽口外面は暗褐色を呈し、空気孔の先端部より内面2~3cm程は暗い赤褐色を呈する。本体破面は黄灰色を呈し表皮に近くなる程暗褐色になる。羽口先端部は多孔性のガラス質溶解物が付着する。付着物の表皮及び破面の色調は暗灰色ないし黒色を呈する。付着物の厚さは薄い。

7) 28 K5区より出土した吹口羽口先端部である。きめの細かい粘土製で、胎土は良くしまり焼成も良い。先端部に鉄滓を付着する。先端部直径は90~100mmで、ほぼ円筒形と考えられる先端部である。空気孔はほぼ中央部に穿つ。空気孔の直径は熱のため膨張し割れ口が広がっているが25mm前後であろうと思われる。羽口外面は暗灰色を呈し、空気孔の先端部内面は赤い赤褐色を呈する。羽口先端に付着する鉄滓は、表皮が暗灰色ないし黒色を呈し部分的に酸化(鉄サビ色)する。また部分的に木炭片を含む。羽口外面側に付着する鉄滓表皮には砂粒が認められ、小豆大の突起がいくつも認められる。こちらの面が下になるものと思われる。また、この裏面である空気孔側は平坦になっており上面となるものと考えられる。破面は多孔質で暗灰色を呈する。全体に比重があり、空気孔側の平坦面の空気出口付近にやや強い磁着が認められる。また羽口外面側の砂粒の付着する部位にもやや磁着がある。

13) 吹口羽口先端部である。あまりしまりの無い胎土を持つ粘土製で、小砂粒を含み破面に若干草痕を有する。器形は中間部より先端部に向って若干開くテーパー状を呈し、先端部直径は75mmである。空気孔は中央よりやや偏した部位に穿ち、直径は24mmである。羽口外面に断面半円形の沈線周全に施す。羽口本体の外面は暗灰色を呈し、空気孔先端部内面は赤褐色を呈する。本体破面は黄灰色を呈し表皮に近くなる程暗灰色になる。羽口先端部は多孔性のガラス質溶解物が2cm

の厚さで付着する。付着物の表皮及び破面の色調は暗灰色ないし黒色を呈し、空気孔の吹出口際の付着物内側の色調は緑青色を呈する。

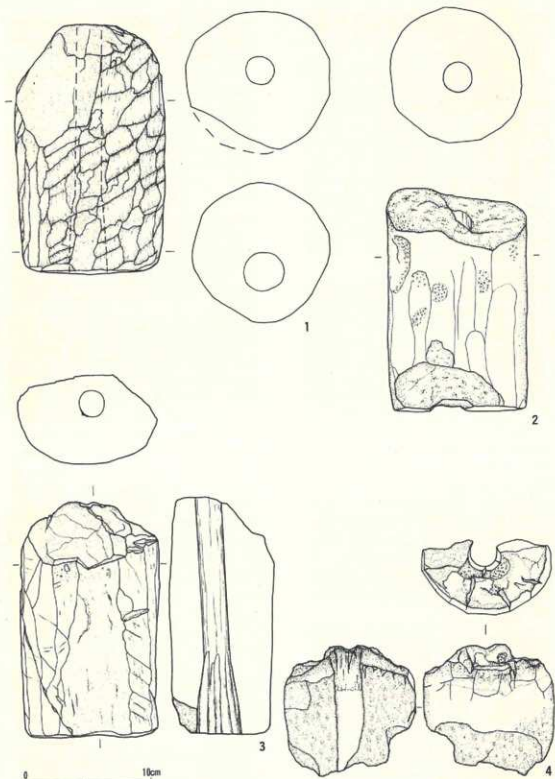
以上が、比較的その器形や使用法に特色を有するものである。先ず石製羽口からまとめると、石質は全て凝灰岩質泥岩で非常に軟質であり加工しやすいものである。器形は円筒形が多い様で、成形痕が明確に残るものがある。粘土製羽口と比較しその直径が若干太い様である。空気孔を穿つ位置は多くの場合中央よりどちらかに偏した部位に穿っており、空気孔の加工は断面が非常に正確に直径が20mm前後真円を呈している。成形痕は細かな上下方向の擦痕が残る。これと比較しソケット部の削り出しは粗雑であり対称的である。この削り出し面は断面半形及び不定形の加工痕が残る。このソケット部の断面形はやや楕円形となるものがある。

次に粘土製羽口は、その胎土に草痕のあるものや、粘土が非常に軟かくブラッシングにより水に溶けるものなど様々であるが、総じて胎土は淡黄灰色のきめの細かい粘土が使用されている様である。器形は、基部が太く先端に行くにしたがい細くなるテーパー状を呈しており、その径は先端部では90~100mmで基部は先端部より1cm前後径が増すものと思われる。基部の残るものは5)の一例しか無く、この羽口に関してはソケットを有す。因上復原をすれば最大径は約35mmで深さ110mmで最小径は20mmである。粘土製の羽口の多くは空気孔の直径が20mm前後である。外面に整形痕の残る例は少なく、残る例はヘラナデ様の器面調整と思われる。また一例だけ器面に沈線を施す例がある。8)は器面全周に上下方向に幅5mm程の断面半円形の沈線を施す。

以上のように、石製羽口・粘土製羽口とも空気孔の直径が20mm前後で、先端部の直径は100mm前後のものが大半である。またこれらの羽口残存部は、石製羽口は基部が残る、粘土製羽口では先端部のやや赤味がかった部分だけが残る。使用する材質によりこれらの違いが表われるのか、或いは羽口の使われ方の違いによるものか不明な点が多い。

また石製羽口のソケット部の最大径、最小径はそれぞれ35mmと20mmであり共通した規模であり、粘土製の羽口でも想定であるが35mmの20mmである。





第36图 羽口実洲图

しかし全て深さが異なる。このことはソケット部のテーパの度合いが異なることであり、いずれにせよ35mm以下の直径を有する吹口空気吹出口がこれに装着させることは確実である。

#### 鉄滓

今回は完形品240点を選び出し更に細かな相関表を作成した。各々の相関関係は、最大長と最大幅、最大長と重量、最大長と最大厚、最大厚と重量を表わした。

この相関表を見る限り次のことが言える。

最大長と最大幅の相関では最大幅/最大長の値が0.8~0.7ぐらいの比率を持つ鉄滓がその大小を問わず多い様である。このことは炉底の形状がややいびつな円形を呈しているものが多いと考えられる。

最大長と重量の相関では、最大長が50mm前後で重量が30gを超えるあたりまでは比較的相関が認められるが、これを越えるとバラツキが多くなり相関関係が認めにくくなる。

最大厚と重量の相関では、最大厚が15~30mm前後の範囲内に様々な重量の鉄滓が分布する。このことはその鉄滓の比重と最大長との関係であり、鉄滓の種類が違ふことを表わすものと考えられる。

最大長と最大厚の相関では、最大厚が15~35mm前後に殆どの鉄滓の最大長が入る。このことは炉底の形状が緩やかな窪みであることを示すものと考えられる。

この様な相関表は鉄滓の形態に関する一分析例であり、これら鉄滓の操業段階を知るには科学分析を持たなければならない。

#### 露頭鉱床

上ノ国町内には各地に第四紀層中に褐鉄鉱床がある。この鉱床は段位堆積中または表土のなかに層状に含まれている。比較的低温で環元されるという褐鉄鉱の産地は勝山館の西方15kmにある湯ノ岱地区が多い。しかし褐鉄鉱の露頭する場所は、道南湯ノ袋鉱山と大平山西方の2カ所である。<sup>1)</sup>勝山館に近いのは大平山西側地区で、地形面に沿って形成されている。<sup>2)</sup>

勝山館で仮りに大鍛冶が行なわれていたとするならば、大平山西側の露頭鉱床を用いたの褐鉄鉱とするのが最も有力であろう。この鉱床は勝山館西方約5kmの地にある。また、勝山館の北東約1.5kmの地にある中須田の現在水田と化している平野

部でも地表下に褐鉄鉱床があるとされており、町内各地にその産出源がある。

また褐鉄鉱床とは別に砂鉄も勝山館北方約2kmの洲崎館の周辺の北村部落付近の海岸に砂丘が発達し、その中に砂鉄がごく少量含まれている。<sup>3)</sup>

#### 製鉄関係小括

勝山館での製鉄は、羽口空気孔が20mmと比較的小規模な小鍛冶が考えられ、鉄滓も碗形鍛冶滓がほとんどであることでこれを裏付けている。今回図示した羽口の中に鉄滓の付着するものがあり、この鉄滓には木炭片が含まれていた。

上ノ国町内には褐鉄鉱の露頭鉱床がいくつか知られており、条件さえ合えば小規模で原始的な大鍛冶を行なえる可能性が考えられる。<sup>4)</sup>

(前田 正憲)

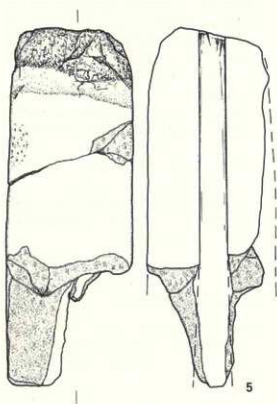
#### 註

1) この他に桂岡鉄山が掲げられる。勝山館より東方約7kmの厚志内(アッシナイ)沢東側に昭和10年頃褐鉄鉱の露頭が発見された。さらに探鉱の結果褐鉄鉱の下に磁鉄鉱体を発見し最近まで生産されていた。この磁鉄鉱床は露天掘され現在もその跡が残っている。

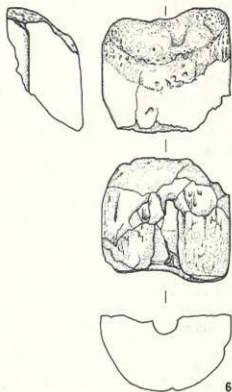
2) 分布面積は150m×40mで厚さ平均1mである。可採量は6,600tで、鉱石はFe53~56%で高品位である。「上ノ国村の地質」1965

3) また、勝山館北方約15km江差町厚沢部(アッパ)川河口伏木戸には砂鉄鉱床が厚さ1mあまり堆積している。

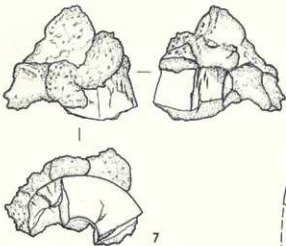
4) 上ノ国村史によると「松前家々臣履書によると元禄十一年十一月に和田喜右衛門が炭釜改を命ぜられているから、木炭製造は、早くから行われていたことが知られている。」とあり元禄11年は1699年である。



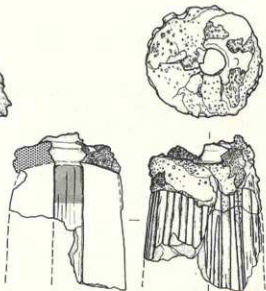
5



6



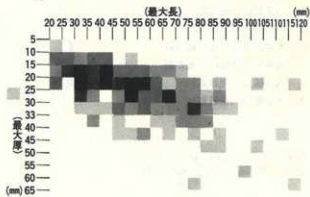
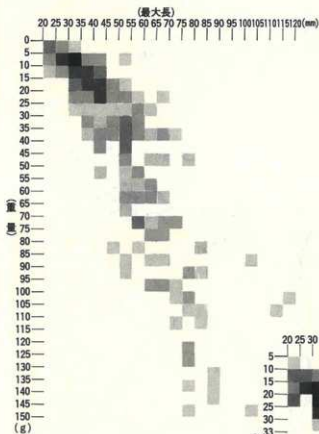
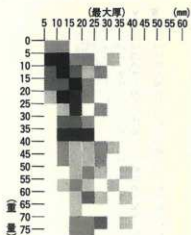
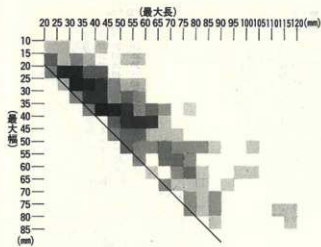
7



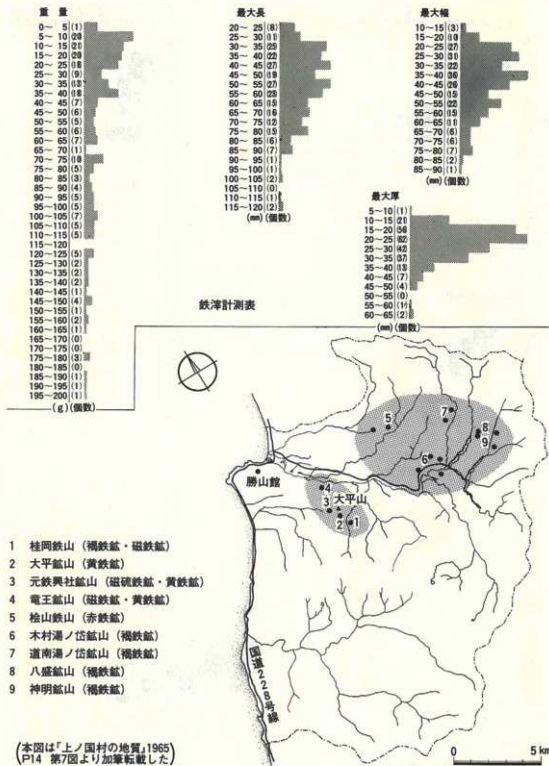
8



第37图 羽口実測图



第38図 鉄滓相関図



第39図 表(上)及び鉄鉱床採掘地区(下)

## 勝山館跡出土の播鉢

小橋は昭和54年以来出土の播鉢995点のうち、館後方空壕外側の遺物廃棄場所出土のもの584点を中心にその概要を述べるものである。

播鉢の産地別の種別は越前987点、美濃系5点、珠洲系2点、不明1点であり、越前が殆んどである。珠洲系のは館内館神八幡宮跡東の階段状に作り出された細長い平坦面から、美濃系のものうち3点は同様に館内から、2点が遺物廃棄場所からの出土である。

### 1. 越前系播鉢

越前系の播鉢には内面口縁下に沈線又は凹線を有するものと、内面口縁下で器厚が薄く作出され、段状を呈するものがある。口唇の形状、播し目、容量等により以下に分類される。尚、帰属不明の口縁部破片37、胴部260、底部59点がある。

第Ⅰ類 比較的小型で容積が2,500cc前後のものである。口唇は丸味を有する形で内面段をもつもの、1~2cm程の所に沈線を廻らすものがある。播し目の間隔は6cm以上と広い。(第41図1、第42図1~4) 第42図1は、内面の沈線も明瞭でなく、体部が約3cm巾で屈曲するものでⅠの別種と思われる。

第Ⅱ類 容積が4,000cc前後と大型のものである。口唇断面丸味を有し、水平に近くなる。内面口縁下1cm程の所に沈線が廻る。播し目8~10条1単位で間隔2.5~6cm程である。凹線より上位に播し目が出ることはない。かなり厚手のものもみられる。或いは細分できるかとも思われる。(第40図1、2、第42図4~9)、8には内面に6条1単位と思われる波状の櫛歯文が横走している。

第Ⅲ類 容積が3,500~3,800cc前後のものである。最大口径部が最頂部と一致する例が多く口唇断面形は鋭角をなし、内削ぎ気味のものも多い。口縁下6~8mm程の所に太い凹線か、6~8mm幅の段が廻る。9~12条1単位の播し目を1.5~3cm程の間隔で内面に施す。凹線、段の上迄播し目がいたっている。内体部中間程(口縁下6~10cm)で播し目が重合する。見込みにも播し目が認められる。又半円状の播し目もみられる。(第41図4、5、第40図3、4、第42、43図10~24。) <sup>41)</sup> 15は半割具にでもよるものか平行する二条の線となっている。18は凹線が鋭く切り込まれているもので本類に含めることを迷うものである。図3は口唇の形が角

形に近いがこれに含めた。

第Ⅳ類 容積が3,300~3,700cc程のものど4,300cc程の二種がある。口唇の断面形鋭角で、ほぼ水平である。外面口縁直下で直立気味に立ち上る。小型のものは最大径が最頂部よりやや下った位置にある。内側口縁直下に凹線又は1cm弱幅の段が廻る。7~11条1単位の播し目が前者では3cm程の間隔で、後者では3~6cm間隔でⅢ類同様凹線又は段の上位から施される。見込みにも密に施される。半円状のものもある。(第40図5、6、7、第41図2、3) 7は丈高の例で底部に下駄印が残る。

第Ⅴ類 容積が3,900cc程のものである。口唇内削ぎ気味に強くきれば水平である。口縁下に5mm程の凹線(7)や浅い段(6)が廻る。10条を1単位とする播し目が内面、口縁下から、間隔1cm程と極めて密に施され、4cm程より下は、播し目が重合する。見込みにも施す。(第41図6、7) 6は口唇が角ばり外傾するもので播し目間隔も広く本類とは異なるかとも思う。

以上をまとめたものが付表である。この表には底部破片のうち播し目の重合が認められるものについて、その底部からの高さによって帰属の類別を推定し、加えてある。(3参照)

第43図25~28は、帰属を明らかにし得なかったものである。25は口唇内削ぎ気味で、直下に段が廻り、9?条単位の播し目が口縁下から施される。外面屈曲の段がある。26、27は、内面口縁が強くつくりだされたもの、28は口唇丸味を帯び、水平で、内面に粗い播し目の施されるものである。

### 2. その他のもの

19~22は美濃系の播鉢である。口縁外側が強く張り出し、内面に細く浅い播し目が施される。鉄錆が塗布される。

23、24は珠洲系の播鉢の底部破片である。静止糸切り痕が残る。色調所謂青灰色で胎土も軟い等越前系のもとの差違がある。<sup>42)</sup>

### 3. 底部破片及び下駄印(25~30)

越前系の底部破片である。29は第Ⅴ類のもの、28、30はⅢ又はⅣ類と推定できる。下駄印には大小の二者がある。

### 4. まとめ

勝山館跡の越前系の播鉢をⅤ類に類別した。これらは、ほぼ年代差を示すものと考えられる。第Ⅴ類としたものは、16世紀末葉に位置付けられて

いるものであり、I類は15世紀末葉とされているものである。<sup>183</sup> 第42図1、2はこの中でも更に遅り得るものと推している。最も量の増大するIII、IV類の年代はおよそ16世紀も中葉から後半にいたる頃と推察出来るところであり、これは、他の船載・国産陶磁器類の分析結果と付合するところであり、勝山館跡の最盛期の頃の事と思われる。<sup>184</sup>

美濃系の播鉢は16世紀代のものであろう。

珠洲系の播鉢については、町内出土資料について一度述べたことがあるが、<sup>185</sup> 最末期の珠洲系の有用な手懸かりである。又、珠洲系のそれと越前ものは遠く迄は殆んど流通しないとのことであり、<sup>186</sup> 恐らくは15世紀後半の所産のものとして推される。勝山館跡での珠洲系のもの確認はこれがはじめてであるが、<sup>187</sup> 先の越前系の古手のものとともに勝山館跡の初期と推される15世紀代の解明に有用な手懸かりである。又、珠洲系のそれと越前

系のそれとの流通の問題にも有用と思われる。

越前系播鉢の分類は筆者の浅学に加えて時間的制約から不十分なものとなった。誤りも多分にある。他日あらためて再考の所存である。

(松崎水穂)

註

1 破片の場合III類とIV類を厳密に区分することは難しく一括した。

2 小野正敏氏から越前系のものに静止系切りの痕を残すものはない旨ご教示を賜った。

3 豊原寺II、1981、県道鯖江、美山緑改良工事に伴う発掘調査報告書1983。

4 史跡上之國勝山館跡IV

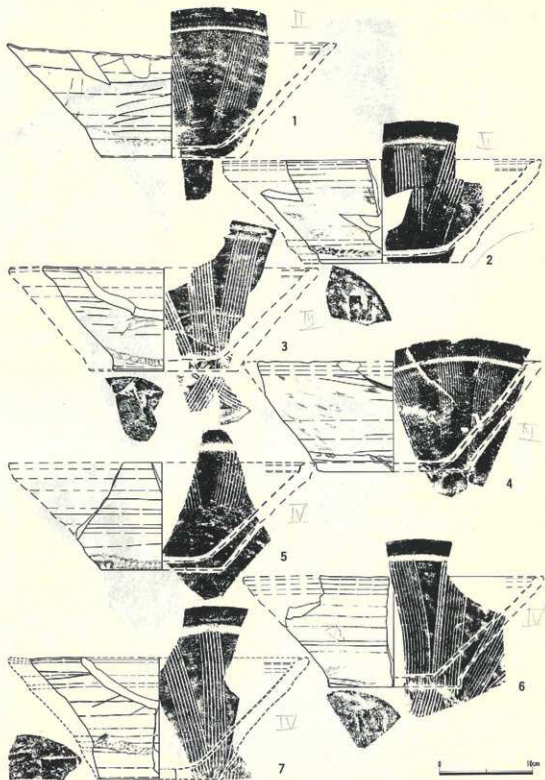
5 考古学雑誌 1980。

6 珠洲焼について吉岡康輔氏からご教示を賜った。

7 註4 史跡上之國勝山館跡 I

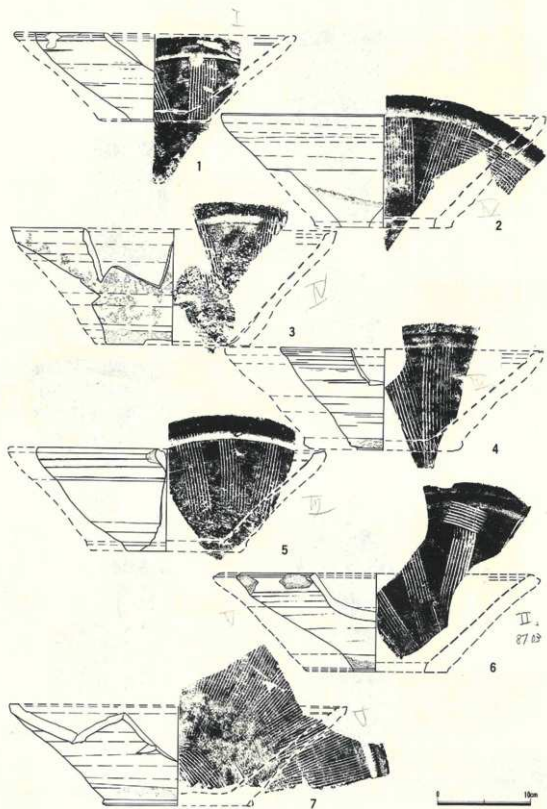
附表 越前系播鉢計数集計表 (壕外部分出土)

類別	項目	容積(cc)	高さ/口径	高さ/底径	口径/底径	備考	破片数	底部推計数	備考	計
I		2582.93	0.321	0.8304	2.580	第41図1	18			19
II		3989.92	0.328	0.6587	2.005	*40*2			底部で押し目の重なるもの	35
		4007.62	0.354	0.8231	2.319	*40*1	30	3		
III		3517.62	0.377	0.7313	1.937	*40*4			底部上2cm以内で押し目の重なるもの	73
		3582.45	0.317	0.6993	2.202	*41*4				
		3678.55	0.341	0.7051	2.064	*40*3				
		3820.21	0.318	0.7229	2.024	*41*5	52	17		
IV		3299.82	0.415	0.9848	2.371	*40*7			底部上5cm以内で押し目の重なるもの	80
		3320.63	0.361	0.8636	2.441	*40*5				
		3373.30	0.379	0.8489	2.237	*40*6				
		4279.39	0.360	0.7593	2.104	*41*3				
		4326.38	0.360	0.8219	2.280	*41*2	42	33		
V		3895.06	0.317	0.7222	2.277	*41*6			底部上5cm以上で押し目の重なるもの	13
		3851.04	0.302	0.7133	2.36	*41*7	8	3		
計		14					150	56		220

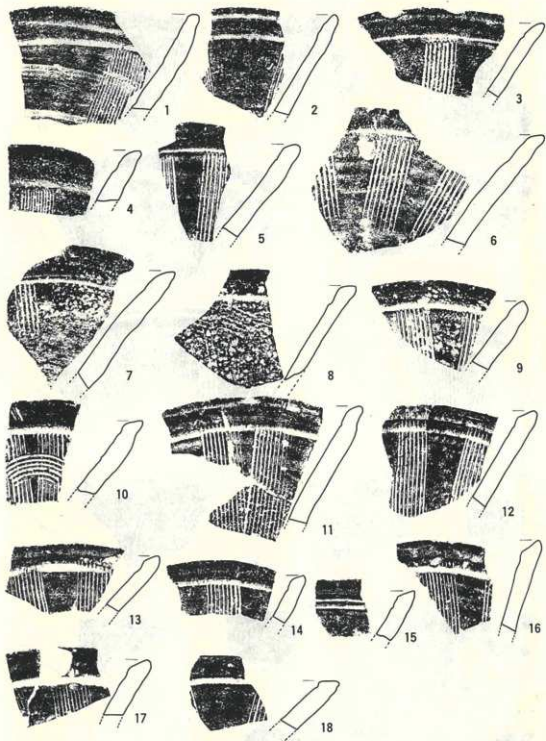


第40回 播針

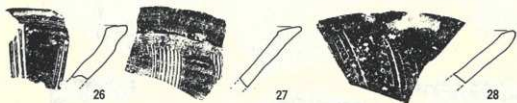
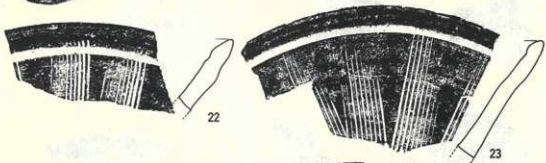
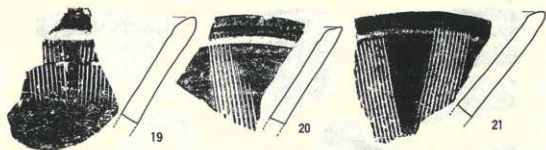




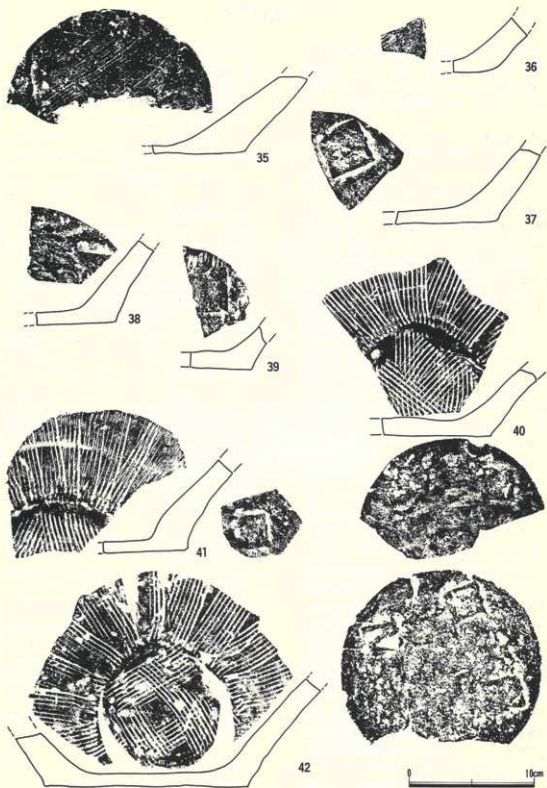
第41圖 樽鉢



第42図 攪鉢



第43圖 撥鉢



第44圖 櫛鉢

## V 保存処理

昭和54年度より現在に至るまで勝山跡跡より多数の金属製品及び木製品が出土し、その保存処理の措置を講ずる必要が生じ58年度より国の補助を得て10ヶ年計画で保存処理事業を開始した。

### 1. 木製品

昭和58年度までの出土量は3,650点である。そのうち今年度は885点を対象として処理を行なっている。処理方法はPEG含浸法による。これはPEG4,000の水溶液に木材を浸漬し木材の内部の水とPEG4,000を置き換える方法である。すなわちPEG4,000の20%水溶液より始め順次濃度を上げていき最終的には100%近い状態まで濃度を上げPEG4,000を含浸させるものである。今年度はPEG4,000水溶液の液温による含浸速度の違いを見するために常温状態での含浸、及び恒温乾燥機を用いた恒温状態での含浸を行ないそれぞれ液面、液温、比重の推移を観察した。尚5月13日より7月8日までは処理の準備期間として全木製品の容器内の水道水取り換えによる不純物の脱洗、及び木製品に付着している泥等の除去、今年度処理を予定していない他の木製品のホウ酸、ホウ砂0.5%溶液浸漬を行なった。

#### ①常温含浸

雑木、用途不明品等822点を行なっている。20%水溶液浸漬は7月28日より開始し10月3日まで行なった。第40図2は液面、液温、比重の推移を示したものであるが、これによると9月8日頃より比重がほぼ一定になる傾向が見られるが、液面にはあまり変化がみられない。その後比重計破損のため1ヶ月のブランクがあったが再び40%水溶液浸漬を11月4日より開始し2月20日現在に至っている。第40図4が液面、液温、比重の推移を示したものである。比重は11月25日頃まで下がり続けその後徐々に上がり1月18日以降ほぼ一定化の傾向を示す。液面については12月12日までは増減がないが12月15日より29日まで下がり続け、その後上昇し1月27日以降再び下がる傾向を示す。尚濃度とも液温と液面、液温と比重の相関関係は見られなかった。また処理中の木製品及び水溶液を観察した結果木製品は徐々に褐色化しており、20%水溶液は木製品より排出される泥等のため褐色

の濁りを生じているが、40%水溶液においては褐色の濁りは殆んど見られなかった。

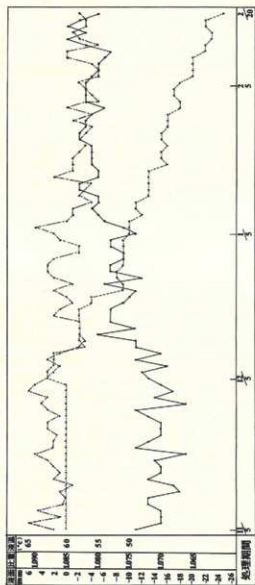
#### ②恒温含浸

用途不明品、生活用品等63点を行なっている。それらは同濃度の水溶液が入っている4ヶのステンレス製容器にそれぞれ分散して入れ密封し恒温乾燥機に入れた。尚乾燥機内の温度は65℃にセットした。20%水溶液浸漬は7月8日より9月1日まで行ない、引き続き9月2日より10月3日まで40%水溶液浸漬を行なった。第40図3が40%水溶液の液面、液温、比重の推移を示したものである。比重は一時下がるが9月24日頃より上がり9月30日以降一定化の傾向を示す。液面は徐々に低下している。尚20%水溶液の液面、液温、比重の推移は比重計未到着により比重が計測不能なため図示できなかった。その後比重計破損のため1ヶ月のブランクがあったが、11月4日より60%水溶液浸漬を開始し2月20日現在に至っている。第40図1は60%水溶液の液面、液温、比重の推移を示したものである。比重は一時下がるが徐々に上がる傾向を示す。液面は12月3日までは増減がなくその後は徐々に下がる傾向を示す。また処理中の木製品及び水溶液を観察した結果木製品は暗褐色を呈しており、水溶液も褐色化していた。これらのグラフの液面、比重の推移を見ると常温40%、恒温40%、60%各水溶液は若干の違いはあるがほぼ同様な傾向を示す。すなわち浸漬当初は徐々に木製品内の水分がPEGと置換され一時比重が下がり濃度が下がるが、密閉しても絶えず液面より水分の蒸発があるため液面はほぼ一定であり液面の増加は見られない。そして徐々に木製品内の水分とPEGの置換が完了してくるに従い木製品内より水分の放出は殆んどなくなり、液面からの水分の蒸発も手伝って液面が下がり比重が増加してくるのである。しかしこの方法では含浸完了の時期が明確に出ない。そのため来年度はこれらの計測の他に濃度、重量の測定も合わせて行なっていく予定である。尚現在行なっている恒温含浸については漸次濃度を上げ年度内含浸完了の予定である。

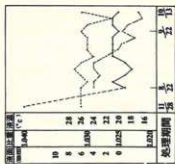
### 2. 鉄製品

昭和58年度までの出土量は2,800点である。その

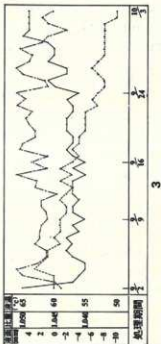
第45図 木製品保存処理推移グラフ



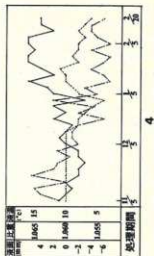
1



2



3



4

液面	—————
比重	—————
液温	—————

うち今年度は699点を対象として処理を行なっている。処理方法はメス、グラインダーによる表面の錆除去後、内部の水分を除去するための100%メタノール浸漬による脱水処理を行ないその後鉄製品自体を強化し、外気との間に皮膜をつくり本体を外気と遮断するためにメタルサッカ、真空計、デシケーター等を用いて20~30mmHgまで減圧させた状態で非水アクリルエマルジョン系の合成樹脂、パラロイドNAD-10のソルベントナフサ溶液に浸漬し含浸を行なう。さらに欠損部をエポキシ充填材を用いて復原し最後に顔料にて補彩

するものである。

本年度は5月13日より開始し7月5日までは表面の錆除去及び脱水処理の際個々の鉄製品が接触し破損するのを防ぐために防虫網を用いたネットケースの作成を行い7月6日より脱水処理を開始し2月20日現在に至っている。今後は随時合成樹脂含浸、復原、顔料補彩を行なっていく予定である。

本稿は基礎的な計数の測定、グラフの作成を前田が行い、両者の打ち合せのもとに斉藤が執筆したものである。

(斉藤 邦典、前田 正憲)

## VI まとめ

昭和58年度の遺構確認発掘調査は、①館神八幡宮跡周辺部に於ける勝山館形成初期ともいふべき館神八幡宮創建期遺構の検出、②空壕、館主体部間の防禦施設の確認及び壕の横断施設の確認、③八幡宮跡周辺、館内最上部に於ける建物配置の確認、④寺の沢地内水利施設の解明を目的に実施した。

①については遂に創建期の遺構検出はなし得なかった。②は八幡宮跡南東、南側の土堤の頂部に杭列を立て並べた欄列と推される溝を検出できた。この溝の更に外側、壕寄りには細い柱列が伴った。垂直の柱穴ではあるが逆茂木等、欄の機能の補強施設の一部であろう。櫓等と思わせる柱穴？列も一部検出したが確定するには至らなかった。③については、かなり細かく階段上に平坦面を作りだし使用していることが伺われたが、重複が激しく個々の建物規模等の解明には至らなかった。現自然遊歩道(旧御代参道路)を中心に左右列が遺構が分れているが、それが相称でない事が判明した。又、各平坦面は必ず小杭列を廻らす溝に囲まれることが勝山館のどこについても通有であることが判明した。又、54年度の調査開始後はじめて、獨立柱建物跡より竪穴状遺構が新しいことを示す切り合い関係が1例ではあるが検出されたことは、この遺構の解明に良い資料を供することとなった。④については、本年度新たに貯水用と思われる井戸跡の検出があり、愈々寺の沢地内該部分が勝山館における用水場所として重要な機能を果たしていた事が明らかとなった。又、土層の観察結果によ

れば、同地区は更に以前(樋、井戸等)の設置以前から生活の場として利用されていた事も判明した。尚、②に関連して空壕を渡る旧道跡を検出したが、江戸時代以前に遡り得る確証は得られなかった。

勝山館跡の環境整備事業は54年度に着手して以来5年を経過した。当初計画に比し殊にその遺構確認調査の進捗が充分でなく諸機関、諸先生のご心配を頂戴するところとなっている。北海道におけるこの時期の調査例は余りなく資料も乏しいところであった。寧ろ、日本の考古学の中にあっても新しい分野であり若い学問でもあった。そしてこれに取り組んだ筆者等は余りにも非力であり戸惑い、迷う所が今も猶界限がない。加えて、この勝山館跡の想像以上の物量の豊かさがあり、遺構の複雑さがあった。3年間には先ずこれに振り回されたといつて良い。この間、諸先生、諸先学の方々の御教示、御指導等を頂戴し、ようやくその基準とすべき指標を概括乍ら整理、理解し、より細密な視点に立つての遺跡との対じをと期するところである。

本年も竪穴状遺構、製鉄？関連遺物、陶器等について若干の分析を試みた。誤り等も多い事と思うところでありご叱正とご教導をお願い申し上げます。

幾分なりともその方向性が見い出されつつある時、予算規模の緊縮期に遭遇した事は今一の遺憾である。当初計画に比しての予算執行状況は、本遺跡の遺構確認調査、環境整備事業の進捗状況と

軌を一にするものとなっているのも又事実である。  
筆者等の浅学と非才を転稼するものではないが、

関係機関、諸氏の御理解を懇願し、もって本事業  
の更なる推進を期するものである。(松崎水穂)



第1表 建物跡柱穴計測表

	P No	大 き さ (cm)	備 考
1号掘立 24K5・6・7・8	P-1	21 × 23 × 63	
	P-2	24 × 22 × 76	
	P-3	24 × 28 × 72	
	P-4	25 × 29 × 61	
	P-5	21 × 26 × 33	
	P-6	23 × 25 × 64	
	P-7	30 × 27 × 64	
	P-8	21 × 24 × 31	
	P-9	28 × 29 × 70	
	P-10	23 × 23 × 58	
	P-11	23 × 20 × 57	
	P-12	24 × 24 × 94	
	P-13	28 × 28 × 78	
	P-14	24 × 25 × 93	
	P-15	26 × 31 × 84	
	P-16	28 × 28 × 90	
2号掘立 24K10・11・19	P-1	27 × 28 × 64	
	P-2	27 × 26 × 64	
	P-3	34 × 25 × 56	
	P-4	25 × 28 × 57	
	P-5	29 × 31 × 85	
	P-6	25 × 25 × 65.5	
	P-7	28 × 23 × 63	
	P-8	21 × 23 × 81	
	P-9	36 × 43 × 52.8	
	P-10	25 × 31 × 22	
	P-11	29 × 25 × 66.5	
	P-12	21 × 23 × 61	
	P-13	27 × 20 × 59	
	P-14	17 × 16 × 12	
	P-15	15 × 13 × 56	
	P-16	12 × 11 × 73	
	P-17	11 × 12 × 16	
	P-18	11 × 10 × 36	
	P-19	13 × 9 × 35.5	
	P-20	13 × 13 × 15	

第2表 竪穴内柱穴計測表

竪穴 No	P No	大きさ (cm)	備考	竪穴 No	P No	大きさ (cm)	備考	竪穴 No	P No	大きさ (cm)	備考
17K11-16区1号	P-1	15×20×20	P-1~P-3 隅丸穴 P-4×P-7 丸穴	24 J 7区 13号	P-8	20×21×23.5	隅丸穴	23 K13区 24号	P-8	20×24×19.5	隅丸穴 隅丸穴
	P-2	17×19×22.5			P-1	12×12×25.5		23 K16区 25号	P-1	20×25×33	
	P-3	11×15×13.5			P-2	10×10×7		P-2	17×19×19		
	P-4	10×12×21.5			P-3	13×10×27.5		P-3	21×22×27		
	P-5	18×12×17			P-4	14×10×20.5		P-4	25×22×28		
	P-6	10×12×21.5			P-5	15×11×20		P-5	20×22×29.5		
	P-7	10×13×12.5			24 J18区 16号	P-1		11×12×36	P-6	26×23×31.5	
18L3-4区2号	P-1	18×16×37	P-1~P-3 四角丸 P-4~P-6 丸穴	24 J18区 16号	P-2	11×12×34.5	P-1~P-8 方形穴 P-7 丸穴	P-7	20×21×35	隅丸穴	
	P-2	20×15×40			P-3	10×11×43.5		P-8	20×15×29		
	P-3	22×20×45			P-4	10×9×27		23 K16区 26号	P-1		21×22×24
	P-4	13×14×40			P-5	11×10×37.5			P-2		21×20×23
	P-5	15×16×32			P-6	10×11×41.5			P-3		26×20×26
	P-6	15×15×40			P-7	10×9×35.5			P-4		27×15×19.5
18K1-6区3号	P-1	16×14×15	隅丸穴	24 J18区 17号	P-8	9×9×33	隅丸穴		P-5	30×26×23	方形穴
	P-2	20×19×28			P-1	7×9×14		P-6	15×14×27.5		
	P-3	22×19×6.8			P-2	9×8×33		P-7	15×17×21.5		
	P-4	8×10×15		P-3	13×10×57	P-8		15×17×23			
	P-5	12×11×12		24 J19区 18号	P-1	11×10×7.5		P-9	23×20×21		
23 J23区 12号	P-1	13×16×20.6	方形穴	22 J23区 19号	P-2	9×9×44.5	P-1~P-3 角穴 P-4 方形穴 P-1~P-3 隅丸穴	P-10	20×21×20.5	隅丸穴	
	P-2	20×21×27			P-3	13×9×30		P-11	13×17×11		
	P-3	23×24×20			P-4	10×10×28.5		P-12	27×25×15.5		
	P-4	22×16×22			P-1	14×9×30.5		P-13	16×17×18		
	P-5	16×12×32		P-2	14×12×21	P-14		16×17×17			
	P-6	21×25×26		P-3	25×25×23.5	P-15		17×24×12.5			
24 J 7区 13号	P-1	20×22×31	方形穴	23 K13区 24号	P-1	8×8×8	方形穴	23 J 3区 20号	P-1	7×8×23	隅丸穴
	P-2	13×16×15			P-2	14×14×23.5			P-2	11×13×15	
	P-3	25×22×24			P-3	10×15×16.5			P-3	10×13×15.5	
	P-4	16×17×26.5			P-4	26×30×14.5			P-4	10×13×19	
	P-5	15×13×19.5			P-5	15×16×9.5			P-5	18×11×22	
	P-6	18×19×16.5			P-6	16×11×12					
	P-7	21×22×21			P-7	15×14×8.5					

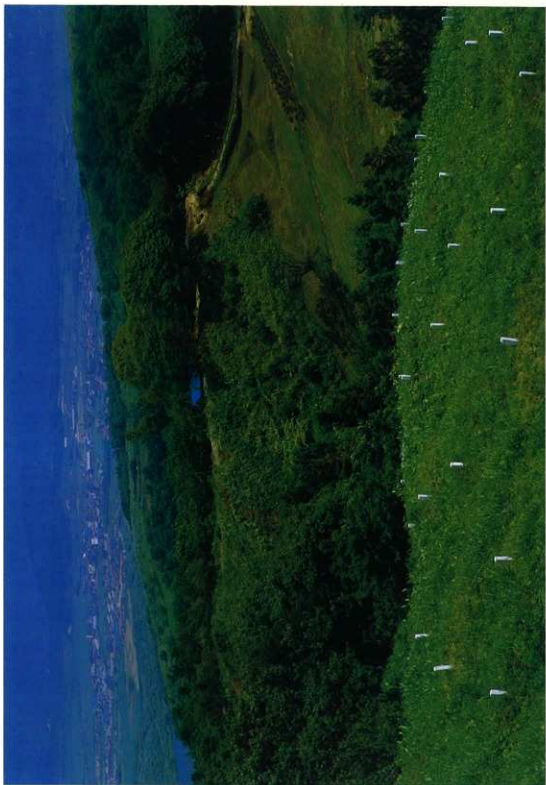
# 豎 穴 遺 構 表

### 第 3 表 豎穴遺構表

地 区	番 号	平 面 形	大 き さ		付 設 遺 構	舌状突出し 方 向	柱 穴 の 数	出 土 遺 物	そ の 他	
			長 軸	短 軸 深 さ						
17 K11 - 16	1	方 形	200	180	76	舌状の突出しあり	N57° E	7	鉄鍋	地床があり (炭化物)
18 L3 - 4	2	＊	230	220	22	舌状の突出しあり	N31° W	6		地床があり (多量の炭化物)
18 K1 - 6	3	＊	170	165	22			5		
18 L12	4	＊	250	230	68	舌状の突出しあり	N82° E	0		地床があり (炭化物)
17 L17 -	5	隅丸方形	420	410	?	舌状の突出しあり				多量の礫が混在 (未調査)
17 L20 - 22	6		290	260	?					(未調査)
18 L8	7	方形?	180	80	?					(未調査)
21 L15 - 21	8	長方形	440	320	10			8		
21 L15 - 20 21 K11 - 16	9	＊	360	240	64	舌状の突出しあり	N69° W	8	鉄鍋、古銭2枚	地床があり (未調査)
21 J22	10	方 形	230	70	15					多量の礫が混在
23 L25	11	隅丸方形	240	240	90			0		多量の礫が混在
23 K23	12	＊	270	220	82			6		地床があり
24 J7	13	＊	290	290	86	舌状の突出しあり				地床があり、多量の礫が混在
24 J16	14	方 形	150	120	未調査					
24 J13	15	隅丸方形	250	200	15			5 (現)		
24 J18	16	＊	250	250	80			8		
24 J18	17	＊	230	220	65			3 (現)		
24 J19	18	＊	260	250	48?			4 (現)		
22 J23	19	方 形	220	180	95					(未調査)
23 J3	20	?	240	180	80					多量の礫が混在
22 J13	21	隅丸方形	210	150	83					
22 J13	22	?	南北2.8m未調査							
23 J17	23	方 形	210	60?	未調査					
23 K13	24	隅丸方形	240	260	80			8		地床があり
23 K16	25	＊	250	240	80	舌状の突出しあり	N60° E	8		
23 K16	26	方 形	260	220	95	舌状の突出しあり	N150° E (S30° E)	⑦8?		
23 K1	27	＊	300	210	未調査					
22 K16 - 21	28	長 方 形	500	250	未調査					
22 K11	29	隅丸方形	220	210	＊					
22 K6	30	＊	260	190	＊					

# 圖 版





PL-1 勝山館遠景(西方より)





PL.2 張芝後の空堀A







PL 3 國產陶器(58年度出土)





PL 4 国産陶器 (中、近世)





PL.5 国産陶器他





PL 6 船載磁器(高付、赤絵)







PL 7 船載磁器(青磁)





PL 8 柏祿磁器(青出)





PL9 第1~3平坦地全景(自然研究路西側)



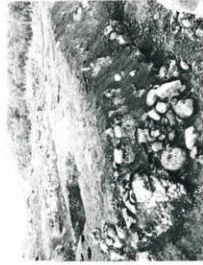
第1～第3平垣地全景(自然研究路東側)



同左西方より



同上北東より(第4平垣地より上部平垣地望む)



第2・第3平垣地全景(自然研究路西側)



PL.10 第3平垣部石垣構造



22、23丁区トレンチ穴全景(南方より)



同上



22丁区トレンチ穴全景(北方より)



同上(北方より)



PL11 23丁区トレンチ穴出土の鉄軸皿





22丁、23丁、24丁区南北ロングセクション



南側土留(土堤)断面



土留頂部溝遺構全景  
(南東より)



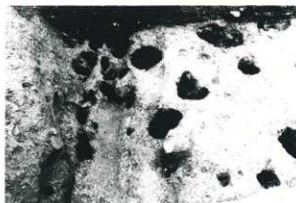
同右上(北西方より)



同上(北西方より)



PL13 第2標列全景(東方より)



第3標列全景(南東方より)



第3平垣部石垣様遺構全景



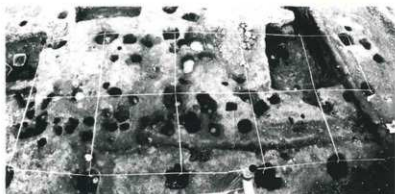
第4櫓列全景  
(北西より)



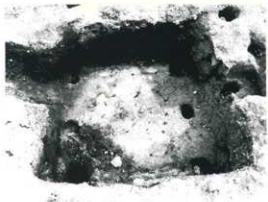
24丁区溝遺構全景(四方より)



同上(南東より)



PL14 第1号掘立柱建物跡全景(南方より)



第12号竖穴全景(西方より)



第11号竖穴全景及び地層断面(南方より)



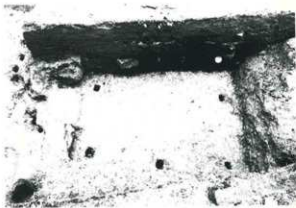
第20号全景(西方より)



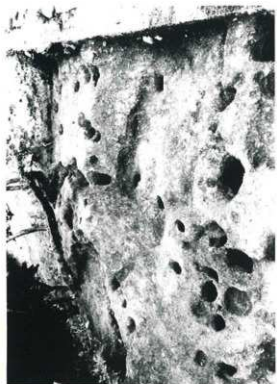
第19号竖穴地層断面



PL 15 同上竖穴内集石



同左全景(西方より)



第15~18号竪穴全量(左上東方より、左下北東より、右上北方より、右下南方より)

PL.16



第25・26号竪穴全景(南方より)



第24号竪穴全景(南より)



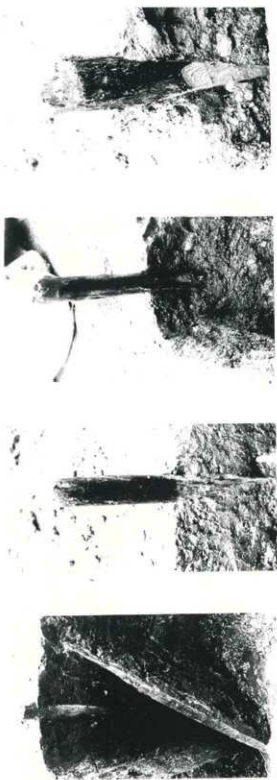
寺の沢区出土木製品(25M区)



寺の沢区池状遺杭部地層断面



PL17 榎木製品のPEG音波作業



寺の沢区杭列断面(各杭の打込み状況)



寺の沢左岸南北トレンチ東壁セクション



寺の沢区井戸遺構東壁



同左南東隅



同上全景(西方より)



同上南西隅

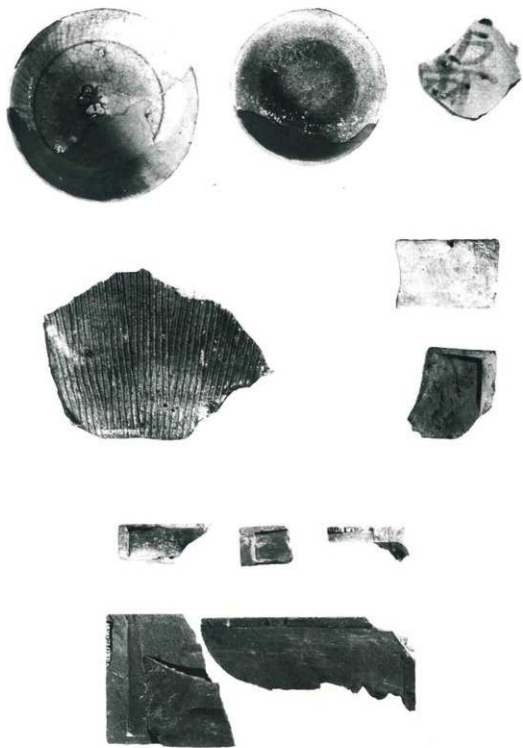


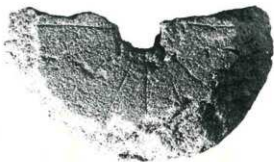
PL19 同上(北方より)



同上北西隅







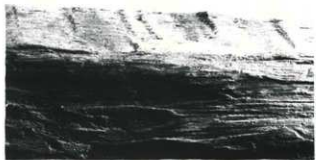
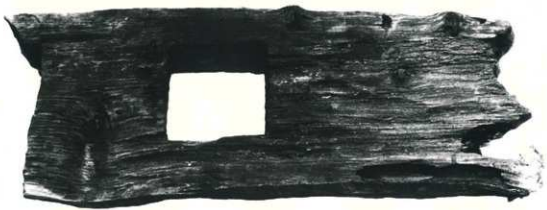








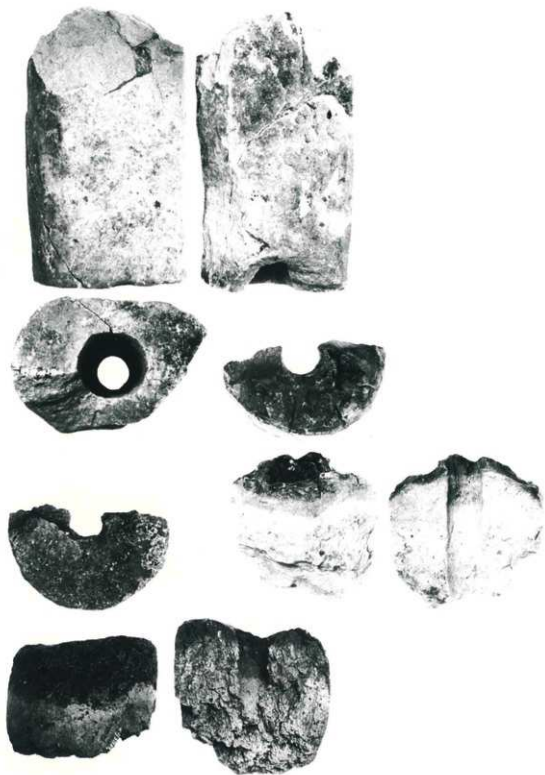
PL.25 木製品 3

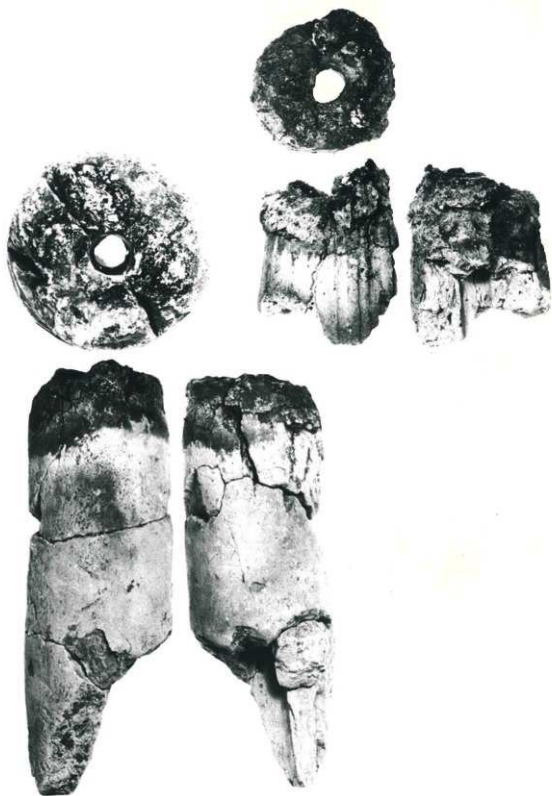


PL.26 木製品4





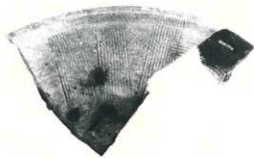
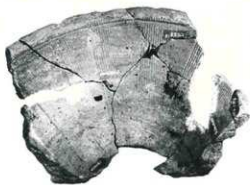
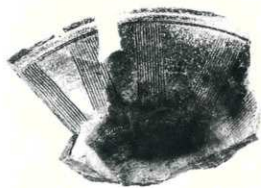


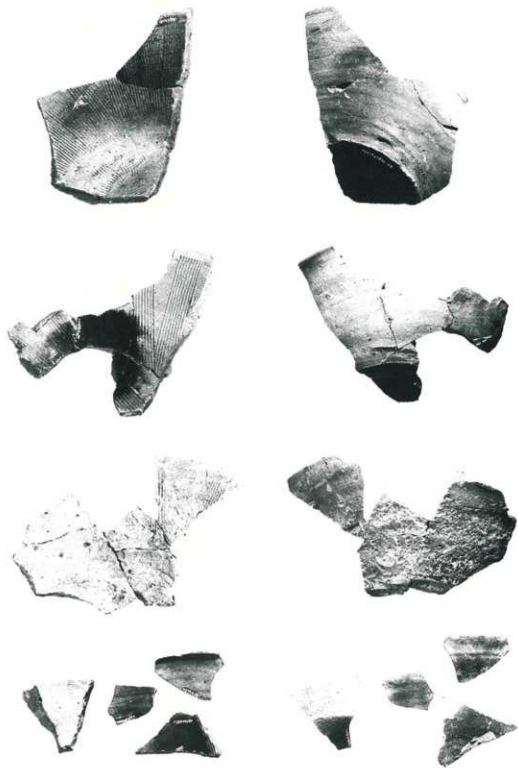


PL.29 羽口3)

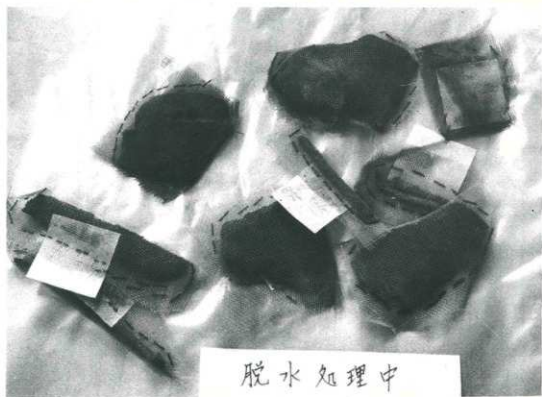


PL.30 羽口(4)

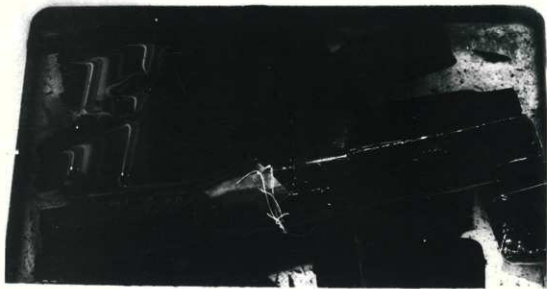
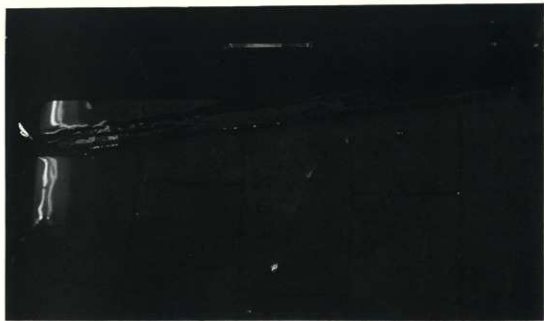




PL.32 摺鉢(2)



PL.33 鉄製品保存処理作業状況(1)



PL 34 木製品保存処理作業状況(2)

---

史跡 上之國勝山館跡 V

—昭和58年度発掘調査環境整備事業概報—

昭和59年3月31日 上ノ國町教育委員会発行

昭和59年5月10日 椋山考古学研究会増刷発行

(椋山郡上ノ國町上ノ國 274 上ノ國町郷土館内)

印刷所 富士プリント株式会社

---

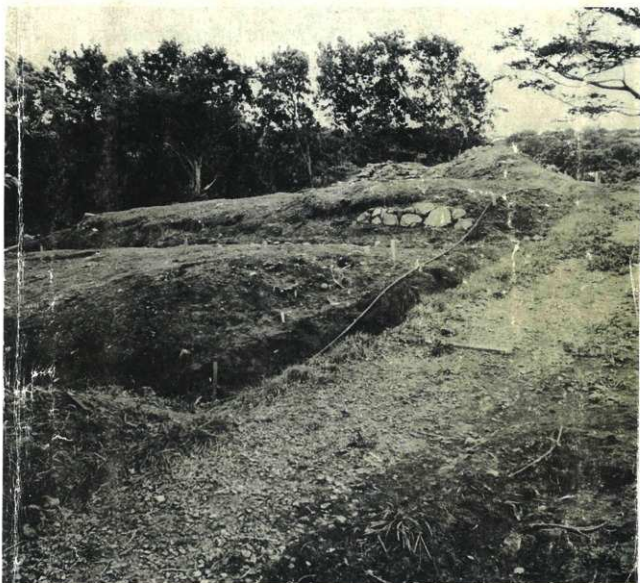




史 跡

# 上之國勝山館跡 V

—昭和58年度発掘調査整備事業概報—



1984・3

上ノ国町教育委員会



史 跡

# 上之國勝山館跡 V

—昭和58年度発掘調査整備事業概報—



## 増刷にあたって

上ノ国町教育委員会が昭和54年度から国等の補助を受けて実施している史跡上之国勝山館跡の環境整備事業は、北海道における館跡の本格的な調査として、その成果の注目されているところであります。

年度毎の概要を伝える概報は発行部数が充分でなく入手を希望する人々に不便をかけていたところであります。

本会では上ノ国町教育委員会の理解を得て昨年より増刷の発行をしているところでありますが、幸いにして多くの方々からご賛同を戴くことができ、今年度も継続することと致しました。広く活用されることを希望するものであります。

1984年5月

松山考古学研究会々長 宮 下 正 司



## 序

史跡上ノ国勝山館跡の環境整備事業は昭和54年度を初年度とし5年を経過するところとなりました。

この間の遺構確認調査により館内各所から各種の建物跡がみつかり、館の外側には空壕、墓所等のあることもわかりました。これに伴って発掘される遺物の量も実に豊富であり、予想以上に勝山館を抱える上ノ国の当時の力は大きなものであったことが伺われるところとなりました。蛸崎氏が松前に拠を移して後も尚、勝山館の果たした役割の大きく、武田信広以来100～150年もの間、上ノ国が北海道の歴史の大きな動きと直接関わっていたことを知り得たことは、大きな成果といえます。

この長年月に亘る勝山館跡の使用が、館内の遺構の複雑さをもたらすところとなり、史跡公園としての整備の上で難しい一面となってきておりますが、今年度は墓所の部分を植栽により表示する工事を行いました。

又、遺構確認調査によって館跡の防禦のための柵列、逆茂木？等も発見されたり、用水井戸がみつかったりし、館の機能がより細かく判明してきております。

今年度も事業の実施にあたり文化庁をはじめとする関係機関、諸先生から数々のご指導とご援助を頂戴致しました。

今迄の成果を踏まえ、次年度以降も、更にこの事業を継続、推進していく所存であります。

昭和59年3月

上ノ国町教育委員会教育長 布施潤一郎





# 本文目次

序

本文目次 / 挿図目次

例言 / 参考文献

I 調査の概要	1
II 遺構	2
1 孤立柱建物跡	2
2 柵列跡	3
3 溝遺構	6
4 竪穴遺構	6
5 その他	18
6 寺の沢地区用水施設	26
III 遺物	34
1 陶磁器	34
2 石製品	34
3 鉄製品	35
4 木製品	35
IV 遺構、遺物における小括	45
1 遺構 竪穴遺構	45
a 孤立柱建物跡	46
b 竪穴住居様遺構	49
2 遺物	55
V 保存処理の記録	72
VI まとめ	74

# 挿図目次

第1図 グリッド配置図	iv
第2図 第1号孤立柱建物跡実測図	4
第3図 第2号孤立柱建物跡実測図	5
第4図 第1・第2柵列跡実測図	7
第5図 発掘区地層断面図 (南北ロングセクション)	9
第6図 第4柵列跡実測図	11
第7図 溝遺構及び柱穴列実測図	12

第8図 溝遺構及び柱穴列、小路状遺構	13
第9図 溝遺構、柱穴列実測図	16
第10図 第11号、12号竪穴実測図	19
第11図 第13号竪穴実測図	20
第12図 第15号～18号竪穴実測図	21
第13図 第19号、20号竪穴実測図	23
第14図 第24号竪穴実測図	24
第15図 第25号、26号竪穴実測図	25
第16図 礎分布図(石垣様遺構、石列、基石等)	26
第17図 石列実測図	27
第18図 土壌実測図	28
第19図 用水施設地形図	29
第20図 用水施設平面図、セクション図	31
第21図 井戸	33
第22図 陶器、石製品(館神八幡宮跡)	36
第23図 陶器、石製品(館神八幡宮跡)	37
第24図 上、陶磁器、石製品、下、鉄製品	38
第25図 木製品(枕)	39
第26図 その他の木製品	40
第27図 木製品(種)	41
第28図 木製品(種、台材、その他)	43
第29図 孤立柱建物跡模式図 (左、勝山館、右、東北北半)	47
第30図 竪穴模式図(勝山館)	50
第31図 グラフ及び舌状張出し方向図	51
第32図 遺構配置図(東北北半部)	53
第33図 竪穴模式図(東北北半部)	54
第34図 上、古銭分布図、下、集計及び径寸、 重さ相関図	56
第35図 集計表及びグラフ	57
第36図 羽口実測図	60
第37図 羽口実測図	62
第38図 鉄滓相関図	63
第39図 鉄鉋床採掘地図	64
第40図 槽鉢1	67
第41図 槽鉢2	68
第42図 槽鉢3	69
第43図 槽鉢4	70
第44図 槽鉢5	71
第45図 木製品保存処理推移グラフ	73

## 例言

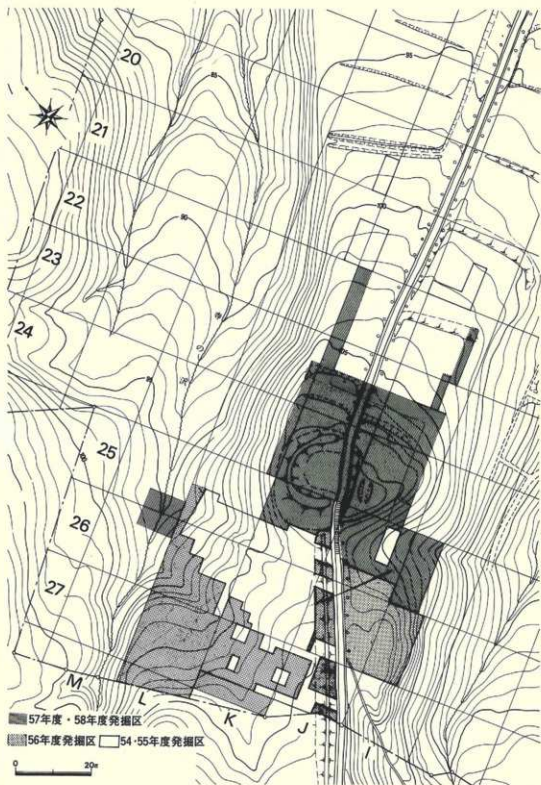
1. 本書は、史跡上之國勝山館跡の昭和58年度発掘調査及び環境整備事業について概要をまとめたものである。
2. 本年度の発掘調査は、次の体制でのぞんだ。  
調査主体者 上ノ国町教育委員会 教育長 青柳隆(4月～5月) 布施潤一郎(6月～)  
主 管 上ノ国町教育委員会文化課 課長 山本吉春(58年4月～6月) 木村幹郎(58年7月～1月) 森 勇一(1月～)  
発掘調査担当者 松崎水穂  
調査員 斉藤邦典、藤田登、前田正憲
3. 本書の作成は、調査員等があたり、執筆は項目別に分担し各文末に文責を記した。
4. 挿図作成は、執筆者が主に行い物業員が補助した。挿図の縮尺は3分の1、3分の2、2分の1を主に用いている。
5. 挿図の中で示した北方位は、磁北を示すものである。
6. 調査にあたっては、次の関係機関と各位に多大な

御協力と御指導を賜った。  
文化庁記念物課 仲野浩、桑原滋郎、加藤充彦、繁見高志 北海道教育委員会文化課 河原林邦雄、中村福彦 東京大学名誉教授 三上次男 名古屋大学 権崎彰一 金沢大学 佐々木達夫 埼玉大学 荒木伸介 東洋文庫 渡辺兼廣 九州歴史資料館 亀井明徳 鳥根県立博物館 和歌山県教育委員会 辻林 浩、上田哲夫 朝倉氏調査研究所 小野正敏 東京国立博物館 矢部良明 北上市立博物館 本堂寿一 岩手県埋蔵文化財センター 昆野 靖 浪岡町教育委員会 工藤清泰 北海道開拓記念館 高倉新一郎、三野紀夫、小林幸雄 札幌商科大学 大場利夫 北海道大学 横山英介 北海道埋蔵文化センター 藤本英夫、竹田輝徳、峰山 巖 函館市教育委員会 鈴木正語 松前町教育委員会 久保 泰、松谷 太、乙部町教育委員会 森 広樹 江差町教育委員会 宮下正司、藤島一己

## 参考文献

青森県の考古学、青森大学出版局編。  
岩木山麓古代遺跡発掘調査報告書、岩木山刊行会。  
周防下右田遺跡、山口県教育委員会文化課、中村徹也  
考古学ジャーナルNo.192 1980年  
鹿角市新斗米館跡第Ⅱ発掘調査報告書 鹿角市教育委員会  
一乗谷朝倉氏遺跡Ⅰ1969年 足羽町教育委員会  
青森県の文化シリーズ13 漁村と漁民の生活  
草戸千軒町遺跡 1969～78年 広島県草戸千軒町遺跡  
調査研究所 広島県教育委員会  
図解考古学辞典、小林行雄  
世界大百科辞典 平凡社  
世界考古学辞典 平凡社  
瀬田内チャシ跡発掘調査報告書 1980年 瀬田町教育  
委員会  
速矢第2チャシ跡調査報告書 1975年 北海道教育委員  
会  
トロコチャシ南尾根遺跡 1976 北海道常呂町  
穂内館 1972年 北海道福島町教育委員会  
上之國勝山館跡Ⅰ～Ⅶ 1979年～82年 上ノ国町教育  
委員会  
浪岡城跡Ⅱ～Ⅶ 1978～80年 浪岡町教育委員会  
史跡根城発掘調査報告書Ⅴ～Ⅶ 1980～81年 青森県  
八戸市教育委員会

多賀城跡 1973～75年 多賀城調査研究所  
後城遺跡発掘調査報告書 1978年 秋田市教育委員会  
大館市片山館跡発掘調査報告書第2次 1974年 大館市  
史編さん委員会  
将木館遺跡発掘調査報告書 1981年 東通村教育委員  
会  
秋田城跡 1978年 秋田城跡発掘調査事務所  
大瀬川C遺跡 1981年 岩手県教育委員会  
北上市立博物館研究報告第4号 1983年 北上市立博  
物館。  
尻八館調査報告書 1981年 尻八館調査委員会  
柏田遺跡 1974年 大館市教育委員会  
富山遺跡永泉寺跡発掘調査報告書 1974年 青森県教  
育委員会  
鹿島館遺跡調査報告書Ⅰ 1975年 北上市教育委員会  
柳田館遺跡  
一戸バイパス関係埋蔵文化財調査報告書Ⅱ 1982年  
一戸町教育委員会  
豊原寺跡Ⅱ華嚴院跡第2次発掘調査概報 1981年  
丸岡町教育委員会  
特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡 泉道晴江・美山線改良工  
事に伴う発掘調査報告書 1983年 福井県教育委員  
会



第1図 グリッド配置図



## I 調査の概要

本年度の調査対象は、昨年度の調査区であった館神八幡宮跡周辺部における未発掘部分（近世時の遺構と重複する部分や竪穴遺構等）とさらに北側の22J、K区、23J・K区、そして寺の沢内の木製品出土地区（井戸跡等）である。

実施面積は1,700㎡である（第1図）

調査は5月16日から10月29日までの130日間行なった。調査の経過は以下の通りである。

館神八幡宮跡周辺部及び22、23J、K区では、自然研究路の東側（22J、23J区）における遺構確認調査（2m幅のトレンチ掘り）、23J区第3平坦地及び柵列の発掘調査、未調査部分の発掘（竪穴遺構、館後方部の土塁頂部、旧道が存在する土塁の南斜面等）、22、23K区（第3、4平坦地）の発掘、という順に行なった。

5月：23J3、8、13、18、23区のトレンチ掘り、23J8区において柵列確認。

23J3区において竪穴遺構2基確認。

トレンチ壁（西側）のロングセクション図作成。

トレンチ内出土の遺物分布図作成。

6月：22J8、13、18、23区のトレンチ掘り  
22J13区において竪穴遺構2基確認及び発掘。

22J23区において柱穴群確認及び発掘。

23J3区の竪穴遺構発掘。

23J8区の柵列発掘。

各遺構の実測図作成。

22J区トレンチ壁（西側）のロングセクション実測図作成。

23J16～19区の発掘（第3平坦地）

遺物分布図作成。

7月：柵列の実測図作成。

24J区（研究路東側）の未調査部分の発掘。  
主に竪穴遺構の発掘（新たに4基15～18号を検出）。

土塁頂部と南側斜面の発掘（旧道跡、溝遺構、柱穴群等の検出）

22K区（研究路の西側）1、6、11、16、21グリットの表土剥ぎ。

24J区竪穴遺構、旧道跡の実測図作成

遺物分布図作成。

各遺構の全景写真撮影。

8月：土提頂部の溝遺構、柱穴群、集石（石列）

等の実測図作成及び写真撮影。

土塁の南北セクション図作成。

館神八幡宮跡（礎石建物跡）部の玉砂利除去及び柱穴群検出と実測図作成。

1号、2号独立のエレベーション図作成。

建物跡全景写真撮影

遺物分布図作成

9月：24K区（第2平坦地）における竪穴遺構発掘及び実測図作成。

22K、23K区遺構確認調査

23K区南北ロングセクション図作成

23K区24K区にかかる部分の自然研究路除去及び集石実測図作成

23K区第4平坦地の表土剥ぎ

竪穴遺構3基、石垣状遺構及び集石検出、遺物分布図作成。

10月：22K1、6、11、16、21区の発掘

同区における竪穴遺構、溝遺構、柱穴群等のプラン確認及び分布図作成。

23K区第3平坦地発掘

柵列、柱穴群、竪穴遺構の検出及び実測図作成。

各遺構の全景写真撮影

自然研究路下部の集石分布図作成

第3平坦地の石垣状遺構の実測図作成及び写真撮影

22K区南北ロングセクション図作成

中旬より土提復原及び発掘区埋めもどし作業開始

遺物、機材等の搬出

調査終了

寺の沢内の調査（木製品出土地区）は、寺の沢左岸（25、26M区）より開始し、同地区における関連遺構の検出、土層観察（右岸との対比）にその主な目的を置いた。

調査の方法は、南北に1m幅のトレンチを設定し基盤が露出するまで掘り下げた。その間出土する遺物は実測して採集した。そして1グリットずつ発掘し遺物包含層（Ⅲa層）の上部まで掘り下げ

た所で留めた。

次に26M24、24区のⅡ～Ⅲ層の掘り下げ、遺物採集、分布図作成を行った。

その後、樋の北東部、空壕Aの突端部に存在する池状遺構の発掘を行なった。

作業は湧水と大形礫の為、覆土掘り下げに困難を極めた。最後に樋状木製品の西側に存在する2m×1.5mの範囲で分布する集石の発掘を行なった。その下部にはさらに井戸状遺構が検出された。

以上の調査に伴い、南北のロングトレンチ東壁のセクション図作成、寺の沢の東西セクション図作成、遺物分布図作成、杭列エレベーション図作成、集石分布図作成、井戸状遺構実測図作成、樋状木製品のPEG塗布、各種遺構の全景写真撮影等を行い約5ヶ月を要した。

本年度の環境整備事業は工事範囲747㎡について行なった。(26I、J、K、27I、J、K、L区)。

## II 遺 構

本調査で検出された遺構は、櫛列、柱穴群(掘立柱建物跡と特定できないもの)、溝遺構、竪穴遺構、石垣(石列?)状遺構、井戸状遺構等である。昨年度の調査によって2～3段の平坦地が検出され、その最頂部に館神八幡宮を祀った跡があったが(この平坦地は郭の中央部を走る自然研究路をはさんで東西に存す)本調査ではさらに数段の平坦地が検出され、本館の構造は、階段状を呈するものであることが明らかになった。この平坦地はさらに北側斜面を下りながら存在するが、下方へ広がるに伴いその面積も大規模なものになっている。

自然研究路によって東西に分離している平坦地には多少の差異が認められる。ひとつは両側の平坦地との間に若干の比高差があること。もうひとつは、各々の平坦地が横一線に並んでいないこと。さらに、道路東側の平坦地は西側に比べやや斜め方向を示していることなどである(附図1、第4図)各平坦地の間はいずれも櫛列が有り、上段ととの比高差は約1m～1.2m程度である。

以下に、各遺構の調査結果をまとめる。

工事内容は、全域に野芝を張付け27L区の土葬墳墓群の各墓基に丸太杭で輪郭を劃し内部に地被植物アジュガの植栽を行った。

27K区を中心に分布する遺物廃棄場所は丸太杭を4.5m間隔に打ち込んで範囲を表示した。使用した杭は120本である。

本年度より遺物保存処理事業が開始され、担当学芸員1名、作業員2名の編成で5月1日よりスタートした。

今年度は主に54年度～58年度出土の鉄製品のさび取りと試験的なものとして数例の鉄製品について仕上げ処理までを行うことに目的を置いた。詳しくは別項にて述べている。

尚、調査期間中埼玉大学講師荒木伸介氏、北海道大学講師横山英介氏、松前町教育学芸員久保泰氏、松谷太氏、斎藤久氏、函館市教育委員会鈴木正語氏らに御助言をいただいた。(藤田 登)

### 1、掘立柱建物跡(第2図～3図)

本遺構は昨年度検出したもので、1号、2号共に、後世に構築された土堤の下部に存在するものであり、いずれも完掘が不可能であった。

1：1号建物跡(第2図)

自然研究路の西側平坦地第2段目に位置する。(24K1、2、3区)、本遺構は11号、12号竪穴遺構と重複しており竪穴が古いものと判明した。

本建物はさらに小規模な柱穴群、溝遺構とも重複しているが、これらは本建物より古い時期のものである。しかしその小規模な柱穴群は柱穴の配列状況からみても特定の建物を想定することはできなかった。(第7図)

計測値によると南北2間は3.85m(12.7尺)東西6間は11m(36.3尺)となり極めて細長い建物である。各柱間は南北に2間が1.9m(6.27尺)で等間隔を示し、東西6間は西から1.5m(4.95尺)、2m(6.6尺)、2m(6.6尺)、1.88m(6尺)、1.8m(5.94尺)、7.8m(5.94尺)とほぼ均等の数値を示す。西側1端の1間(1.5m)は、他の5間に比べ間

差があることから庇とすべきかもしれない。

柱穴は20個検出したが、うち2個は竪穴遺構内にあり、その覆土を掘り込んでいる。

掘り方は径40cm～50cm、深さは80～90cmを測り、一定した数値を示す。平面形は方形あるいは隅丸方形を呈す。いずれにも角柱の痕跡を残している。

第7図の小規模な柱穴群は掘り方が20～30cm位のもの、35～40cm位のものがあり、深さも10～70cmと一定せず全体的には測定差が著しい。平面形は隅丸方形を呈するものが多く円形に近いものは極めて少ない。その配列は一部が東西に延びる溝遺構に沿って並ぶものがあるが全般に規則性がなく、建物の存在を想定するには極めて困難な状態である。同区で昨年度出土した石製の盤(火鉢?)は1号掘立の内部に位置するが小規模柱穴群からは外部にある。

## Ⅱ：2号建物跡(第3図)

本遺構は自然研究路西側の頂部平坦地(24K11、12、13区)にあり、ほぼ同位置に鎧神八幡宮の礎石建物跡がある。両者は一部分重複しており後者が新しいものと判明した(勝山館Ⅳ 1983年上ノ国町教育委員会)。

北側の柱穴列の一部は後世の土提が残存している為検出できなかった。

計測値によると南北3間半は6.5m(21.45尺)東西2間半は9m(29.7尺)を測る。各柱間は南北3間半は南から2m(6.6尺)、1.8m(5.94尺)、1.8m(5.94尺)、1m(3.3尺)東西2間半は東から4m(13.2尺)、4m(13.2尺)、1.2m(3.96尺)となり、南北の柱間比は東西はその倍の数値となっている。

西側1端の1間(1.2m)、北側1端の1間(1m)は庇と思われるが、北側はその大部分が未調査区域(土提下部)に延びている為庇とすべきかは述べられない。

掘り方は径40～50cmを測り、深さ70～85cmを測る。平面形は隅丸方形を呈す。いずれも角柱の痕跡を残している。又、南側にある東西2間半の柱穴列は重複しており建替えによる柱の移動が考えられる。さらに、西側にはL字状に残存している周溝とそれに伴う径25cm程度の円形の柱穴様ビットが南北に列をなしている。柱間は南から0.85m(2.8尺)1.9m(6.27尺)、1.95m(6.44尺)1.8m(5.94尺)となり、南側1間を除くとほぼ一定の数

値で並んでいる。同建物に伴うものと思われるが、建物の南北軸方向との間で若干のずれがある。尚、同建物内部の西側寄りに基盤が焼けた部分が認められた。

## 2、櫛列跡(第4図～6図)

本遺構は、自然研究路の東側に3列、西側に2列検出された。道路東側の第2平坦地と第3平坦地に存在する櫛列は完掘したが、第4平坦地に存在するものは2m幅のトレンチ内で確認されたものである。第4櫛列は道路西側の第3平坦地に存在し完掘したが第4平坦地に存在する第5櫛列はプラン確認だけに留めた。

第1櫛列(第4図)は昨年度検出されたもので勝山館Ⅳで述べている。

第2櫛列(第4図)は第1櫛列と同様に複数の櫛列が重複していた。それらの櫛列は西側と東側との柱穴列方向が若干異なりほぼ中央部で交差する状態になっている(第1櫛列も同様である)。西側の櫛列は重複している中央部で消滅しているが西側突端部は北側へ折れ曲って延びている(未発掘部分)。柱穴列は溝の外部に列をなしており角柱の痕跡を残す掘立である。掘り方は径20～50cmを測り深さ65～75cmを測る。平面形は方形を呈す。柱間は西から1.5m(4.95尺)、2.2m(7.26尺)1.8m(5.94尺)となりややばらつきがある。東側は柱穴列と溝との複合のものとなり幅広の溝の内部に小ビットを無数有するものが重複しており掘立柱は伴わないものである。

溝と柱穴の複合は柱穴が多数並び数回の建替えが想定される。

掘り方は径30～50cmを測り深さ70～85cmを測る。平面形は隅丸方形で角柱の痕跡を残す。

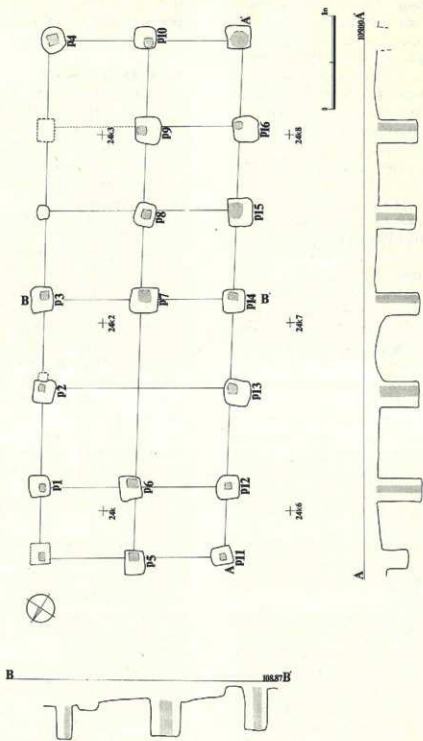
柱間は計測可能なもので西から1.5m(4.95尺)、1.5m(4.95尺)、1.5m(4.95尺)、1.5m(4.95尺)となり等間に並ぶ。又同櫛列の上部覆土中に径15～20cm程度の自然礫が集石していた。第4櫛列は2本の櫛列が並走している。

各々浅い溝に掘立柱が伴うものである。

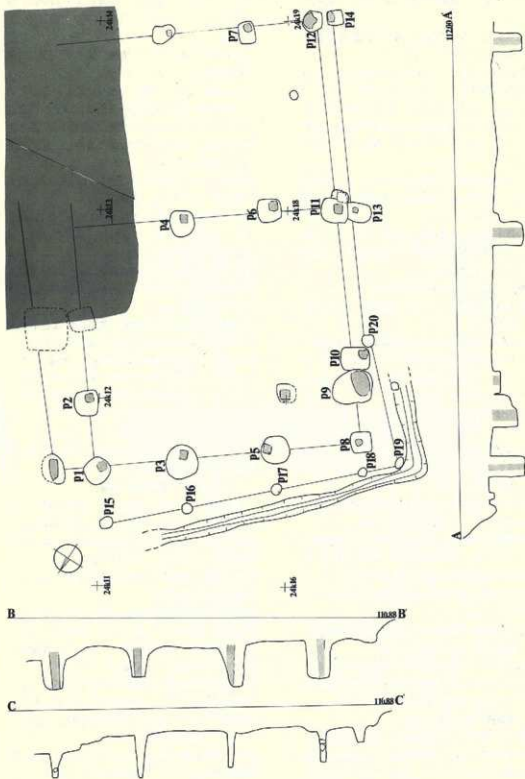
掘り方は径30～50cmを測り深さは75～90cmを測る。平面形は方形を呈す。

柱間は西から1.8m(5.94尺)、2m(6.6尺)1m(3.3尺)となる。尚西側は約5mの未発掘部分がありさらに数mは延びている可能性がある。又、





第2图 第1号掘立柱建物跡実測图



第3图 第2号掘立柱建物跡実測図

当欄列に近接して建物が想定される柱穴の配列がみられる。

計測値によると南北2間は3.4m (11.22尺)東西3間は5.6m (14.48尺)となる。

各柱間は南北は南から1.65m (5.45尺)、1.75m (5.78尺)東西は西から2.1m (6.93尺)、2m (6.6尺)1.55m (5.1尺)となる。1本は断面形がU字状を呈するもので幅約45cm、深さ約50cmを測り内部に小ピット状の凹みが残る。覆土は黒褐色土土で極めてソフトである。

もう1本は断面形がV字状を呈するもので最大幅(開口部)は約35cm、深さ50cmを測る。内部には小ピットが点在する。

両者の新旧関係は、重複する部分によるとU字状の溝がV字状の溝に切られていることから、前者が古いものと判明した。

本遺構は、掘立柱様の柱穴は伴わないが、おそらく館後方部の外周をめぐる礎が設けられていたものと思われる。

石組の階段と重複する二本の溝遺構は、幅が30~40cmで深さは約10cm程度で浅く、内部に小ピットも有しない。近接する部分に柱穴様ピットが点在する性格は不明である。

第9区は研究路の東側最頂部の平坦地(24J区)に存在するL字状に屈曲する溝遺構(西側に近接して13号竪穴がある)で内部に掘立柱の柱穴が集中している。溝は東西方向に約3.5m、南北方向に約3m延びた所で消滅している。

断面形はU字状を呈し東西方向は幅が開口部70cm深さ約55cmでやや小規模な建物である。

柱穴は10個あり建物らしい配列を示すが不規則になる。たとえば、掘り方は径20~40cmを測り、深さ20~80cmを測るもので特に深さが一定していない。又、以上の柱穴の他に溝の内部には小ピットも混在している。

本欄列は石垣状に積まれた大型の礎が多数出土しそれらを除去した後に検出された。

第5欄列はプラン確認で留めたが溝と柱穴列が並走するものであった。同部分も多量の礎で覆われておりそれは主に道路寄りに集中している。

### 3、溝遺構(第7図~9図)

本調査で検出された溝遺構は、館後方部の土塁(土堤)の頂部に2本、昨年度検出した石組の階段下部を横走するもの1本、上部に南北に走るもの

1本、1号掘立と重複する部分に1本(24K)、22、23J区のトレンチ穴内に2本(プラン確認のみ)である。

土塁最頂部に存在する溝遺構(第8図)は、館後方部を囲むように廻っている。

二本の溝は一部では重複したり並走したりしている。研究路の東側最頂部の平坦地(24J)に存在するもの1本は南北方向で開口部約50cm、深さ約20cmを測る。柱穴は東西方向に集中し、配列状況から小規模な欄列とも思われる。

計測値によると最長のもので4.7m (15.5尺)短いもので2.7m (8.9尺)を測る。

各柱間も顕著なものでは西から0.95m (3.14尺)、1m (3.3尺)0.75m (2.48尺)、南北では各1m (3.3尺)の等間となっている。

掘り方は径20~40cmを測り深さは30~60cmを測る平面形は隅丸方形を呈す。内部に角柱の痕跡を残すものが数例あった。

1号掘立と重複する溝遺構(第7図)は2本並走しているが1本は殆んど原形を留めていない。

幅は約30cmで深さ約25cm程度あり、内部に小ピットを有す。又掘立の柱穴が伴い溝の外部に列をなしている。しかし周辺に点在する柱穴群と混在しており特定の柱穴列を確認するのは不可能な状態であった。

掘り方は径30~40cmを測り深さ25~70cmを測る。平面形は隅丸方形を呈す。

### 4、竪穴遺構(第10図~15図)

本調査で検出された竪穴遺構(以後は竪穴と呼ぶ)は20基で、プラン確認に留めたものは22J、K区のトレンチ内における6基と23J、24J区の未発掘部分にかかるもの2基である。

過去の調査(55年度)で約10基が検出され、合せると30基にも及ぶ。

本遺構が広域な舌状台地上一円に分布することは勝山館Ⅳ(1983)でも述べたが、当地区(57年と58年度発掘区一第1図参照)においては重複例も多く、一部に集中した配置もみられる。

特に24J区の頂部の平坦地に存在する15号~18号は重複関係がはげしく原形を留めないものもある。同地区ではさらに近接して数基が重複して存在している(石積の階段真下になる)。

他に22J23J区の19号、20号、21号と22号等も重複関係にある。以下に調査結果をまとめる。